

第六章 靜助辭 附、頭助辭

第一節 靜助辭總說

靜助辭の解

靜助辭は、わかり易く言へば活用の無い助辭である。例へば「春が來れば花も咲き鳥も鳴く」の「が」「ば」「も」の類がそうだ。しかし嚴密に言へば、靜助辭とは敘述性を持つて居ない尾助辭だと云はなければならない。何となれば活用が無くても敘述性の有る助辭例へば「彼の方は洋行するさうです」の「さう」(第二五頁)などは、活用はないが敘述性が有つて形容性の動助辭であるから、活用のないものを全部靜助辭だとすれば「さう」は兩方へ這入ることになる。故に「靜」とは敘述性の無い意味だと解釋すべきである。

尾助辭

助辭を分けて動助辭、靜助辭、頭助辭の三つとする。そうして動助辭と靜助辭との二つは他語の下へ附くものであつて頭助辭に對して尾助辭である。

靜助辭の五種

靜助辭に五種有る。一、格助辭、二、感動助辭、三、提示助辭、四、名助辭、五、副助辭、この五つである。

格助辭

一格助辭 格とは詞の斷續に關する資格である。意義が切れるならばどういふ風に切れるか、下へ續くならばどういふ風に續くか、その斷續を示すのが格である。そうして格を示す助辭を格助辭といふ。

「花が散る」の「花が」は「散る」といふ動作の主として「散る」へ續く。之を主格といふ。「花を散らす」の「花を」は客として「散らす」へ續く。之を客格といふ。主格や客格は各詞の格である。そうして「が」「を」は格助辭である。

「酒を飲んで心を慰める」の「飲んで」は「慰める」の方法を表すとして下へ續く。之を方法格といふ。「酒を飲めば酔ふ」の「飲めば」は「酔ふ」といふ事件の起る機會を拘束する。之を拘束格といふ。方法格や拘束格は動詞の格である。「て」「や」「ば」は動詞の格を示す助辭である。

格は五品詞皆有るのであるが、副詞、副體詞、感動詞の格は常に一定してゐるから、別に格を示す必要が無いが、名詞と動詞とは用法に因つて格が變るのである。それ故名詞と動詞は格助辭を附けてその格を區別する。

格助辭には體言の格助辭と動詞の格助辭との二種が有る。故大槻博士は前者を第一類と稱し、後者を第三類と稱した。(第二類は提示助辭)

感動助辭

二 感動助辭 疑問、命令、感動等、廣義の感動(情意)を表すものである。早く「起きるか」「早く起きろ」「まだ早いよ」「ろ」「か」「よ」などの類である。

提示助辭

三 提示助辭 意義を特別に提示するものである。「東京へはまだ行かない」「綺麗にも見えない」「内にはかりある」の「は」「も」「ばかり」の類をいふ。これは格の既に定まつたものへ附く。「東京へ」「綺麗に」「内」は格が既に定つてゐる。大槻博士は此の提示の助辭を第二類と稱した。

名助辭

四 名助辭 名詞的性質を有する助辭である。「私たち」「貴方がた」「社長さんの」「たち」「かた」「さん」などの類がそうだ。詞たる名詞と違ふ點は單獨に使へないことに在る。

副助辭

五 副助辭 副詞的性質を有する助辭である。「歩きながら話す」「買物がてら散歩する」の「ながら」「がてら」の類がそうだ。

特殊靜助辭

靜助辭には以上の五種有るが、其の中には文法上必要の薄い特殊な形式的意義を表すものがある。之を特殊靜助辭といふ。例へば名助辭の中でも「人間味」「一人前」の「味」「前」の類、副助辭の中でも「容物ごと運ぶ」「土地を家ぐるみ買ふ」の「ごと」「ぐるみ」の類がそうだ。特殊靜助辭と特殊動助辭とは文法上價値の低い尾助辭であつて之を接尾辭といふ。但し世

狹義の靜助辭

間では名助辭と副助辭とは文法上の價値が低いものと見て全部を接尾語と稱してゐる。特殊靜助辭に對して文法上の一般的な形式的意義を表はすものは狹義の靜助辭である。詳しく言へば一般靜助辭である。

第二節 格助辭

體言の格助辭

體言の意義

體言は主として名詞であるが、名詞でない體言も有る。例へば「あなたの一言」といふ時の「あなたの」は「あなた」といふ名詞の連體格であるが、「否との一言」などいふ時の「否との」は「否」といふ名詞の連體格ではない。而も體言の連體格とは謂へる。體言とは或る意義を一實質として表す語であつて形の上から言へば無活用語である。故に「立派」「巨大」「微弱」などは形容詞であるが體言である。體言とは名詞ばかりをいふのではない。

體言の格を表す格助辭には「が」「を」「に」「へ」と「より」「から」の八つが有る。この外に「まで」を格助辭の中へ加へる説も有るが、私は「まで」は名助辭の中へ入れたいと思ふ。

(第三頁参照)

「が」の用法

「が」の用法 主格 主語

口語の「が」は體言の下へ附いてその體言が主格に在ることを示す助辭である。

主語と敘述語

主語	敘述語
月が	出る

主語	敘述語
圓い月が	山の上へ出る

連詞

連詞

主格

右の例の「月が」は下の「出る」に對して主語である。「圓い月が」は下の「山の上へ出る」に對して主語である。凡そ甲乙二語が一連詞を成す場合に甲が乙に對して乙の事柄の主體を表し、乙が甲に對して甲の事物の作用を敘述するならば甲は主語で乙は敘述語である。體言が主語となるべき資格を主格といふ。「月が」は主格といふ資格を持つてゐる。故に右の例に於ける如く連詞中に在つて主語の立場を取る。「月が」は「月が」だけでも主格である。しかし「月が」だけでは主語ではない。主語とは敘述語と統合された場合だけをいふのである。

「が」は體言の下に用ゐられて其の體言が主格に在ることを示す記號である。體言へ「が」

無格

附いてゐる場合には之を主格の體言といふ。「月が」は主格の體言、主格の名詞である。

下に「が」などが無く唯「月」だけであるならば之を無格の名詞といふ。無格の名詞はまだ何等の用途の決まつて居ない名詞である。無格では斷句中に用ゐられない。斷句中に用ゐるには必ず格が要る。辭書などに標示してある名詞は無格である。

一般格

主格の名詞は必ず「が」が有る。しかし「が」の無い名詞でも主語又は客語などになり得る。

1 御母様、御飯	主語	おい	車	有るか。
客語		客語		
2 御飯	客語	食	車	持つて來い。

の(1)の「」は主語で(2)の「」は客語である。これは斷句中に用ゐられてゐるから、助辭は無くても無格ではない。格は有るのである。しかし主語ともなり客語ともなるからその格は主格、客格といふ様な局限されたものではない。之を一般格といふ。一般格は一般的な格であつて用法が廣く、格の助辭の附いて居ないものである。文語の主語は「花散る」「月出づ」の「花」「月」などの様に一般格から成る。文語には主格はない。

「が」は靜岡縣長野縣あたりでは二音節以上の語へ附くと音便で「ん」になる。「人ん來た」「月ん出た」など。

「が」の特別な用法

何れ後に詳しくいふが「が」は名詞でない體言へも附く場合がある。

1 昨日あの人の處へ行つたが不在だつた。

2 昨日あの人の處へ行つた所が不在だつた。

同義

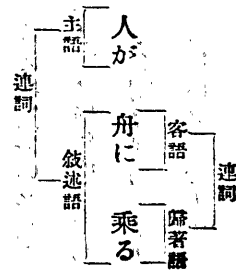
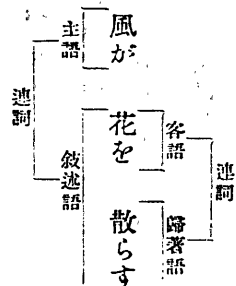
の(1)の「行つた」は動詞であつて體言である。(2)の「行つた所」は名詞で體言である。何れも主觀的には「あの人の處へ行つた場合があの人不在だつた場合である」の意である。(1)の「行つた」は「行つた場合」を「不在だつた場合である」の主として表したのである。

「を」の用法

客語と歸著語

「を」の用法 客格 他動格 客語

「を」の用法を説く前に客語を説く必要が有る。



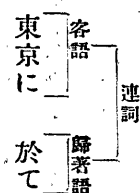
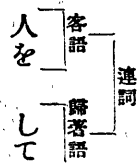
右の例の「花を」「舟に」は「散らす」「乗る」に對して其の關係物(客體)を表すものである。之

客語は動詞以外の語にも應る。

客格

を「散らす」「乗る」に對して其の客語といふ。「散らす」「乗る」は「花を」「舟に」に對して其れに歸著する事柄を表すものである。之を「花を」「舟に」に對して其の歸著語とする。なぜ歸著語といふか。其れは、「散らす」「乗る」は「風が」「人が」から派生する事柄であるが、其の歸著する所、納まる所は「花」「舟」であるからである。

客語は動詞を歸著語にする場合が多いが、動詞でないものを歸著語にする場合も有る。



などに於て「して」「於て」は動詞ではない。副詞である。

「花を」「舟に」「人を」「東京に」は右の諸例に於てその歸著語に對する客語であるが、「花を」「舟に」「人を」「東京に」だけを取り出したならば、もはやその相對の對手がないから客語ではない。しかし客語となるべき資格はある。この資格を客格といふ。「を」「に」などの助辭は客格の記號である。

「を」「に」「へ」「から」と「より」の六つは體言の客格を示す記號であるが、それぞれ違ふ客

格を表すのであるから、客格は細分されなければならない。

他動格
他動、自動

「を」の示す客格は之を他動格といふ。他動格の語より成る客語は之を他動の客語といふ。動詞に他動性、自然動の別が有る。

風が花を散らす 盜賊が人を殺す 猫が鼠を捕る……他動性

花が散る 人が死ぬ 風が吹く……自動性

他動性の動詞は他物を引張り込んでその動作の材料に供用する性質を持つてゐる。右の「――」は他動性の動詞で上の「△△」を自己の動作の材料に取入れる。「△△」はその引込まれる材料を示す語で「――」の他動性に對する客語である。そうしてその格を他動格といふ。自動性の動詞は他物を自己へ引込む性質の無い動詞である。「――」は自動性であつて「何々を」へ續かない。

臨時の他動
化

右の例の他動性動詞は本來他動性なる動詞であるが、自動性動詞でも臨時に他動性を帯びることが有る。例へば「尾が垂れる」「人が眠る」「酒量が増す」「試験が終る」の「垂れる」「眠る」「増す」「終る」は自動性であるが、「尾を垂れる」「目を冥る」「酒量を増す」「試験を終る」などいふ時は他動性を帯びる。

32-48 32-48
82-74 82-74

副詞、名詞
の他動

「を」の性質

他動性は唯動詞に有るだけではない、動詞以外の語にも有る。「人をして」「筆を以て」の「し」「て」「以て」などは他動性の副詞である。「城を枕の討死」「女を對手の喧嘩」などいふ時の「枕」「對手」は名詞であるが他動性を帯びた用法である。

「を」は他動性の有る語の他動性に對する客語となり得べき資格を表す記號である。換言すれば「を」は體言へ附いてその事物が他語の表す事柄の材料に取入れられることを示す助辭である。

比喩的に言へば「何々を」は他動語の食物である。他動語は餓えた語である。「花を見る」の「見る」は餓えた語である。「花を」を食つて満腹する。満腹すればもはや食物を求めない。即ち意義に缺陷がなくなつて意義が完備する。

「を」の用法の中には他動の客語でないと誤解され易いものが有る。

山を上る 川を渡る 門を出る 空を飛ぶ

の「――」などは往々他動の客語でないと誤解される。

「を」の語源

「を」の語源は感動の助辭の「を」であらうと思はれる。

八雲立つ出雲八重がき妻ごみに八重がき作るその八重がきを。古事記一

足引の山より出づる月まつと人には云ひて妹まつ我を。萬葉集三〇〇二

などの「を」は感動であるが何れも特つ所有の感動である。そのものを捉へる意がある。之を「はや」に比べると

その八重がきはや——その八重がきはまあとであらう。

その八重がきを——その八重がきをまあとしよう。

といふ様な気分、そういふやうな餘韻が有ると思ふ。「はや」は題目を提示してその説明を豫想し、「を」は材料を提示してその處分を求める様に思ふ。故に「を」は感動であつても「よ」とは違ふ。

感動の「を」が知識的になると他動格の助辞になる。随つて名詞でなくとも

萩が花散るらむ小野の露霜に濡れてを行かむ、小夜は更くとも。古今集三三四

などの様にも用ゐられる。唯「濡れて行かむ」といふのではない。「濡れて」といふことを「行く」のしかたにしよう、行くに「濡れて」を以てせむの意である。それ故「濡れて」を動詞のまま體言化して他動格にしたのである。

「雨ふれど露も洩らじ」を笠取の山は如何にかもみちそめけむ。古今集二六一

「夏の夜はまだ宵ながら明けぬる」を雲の何處に月やどるらむ。古今集二六六

の「は」は「無視する」といふ形式的意義を持つてゐる。「は」は客語で「は」は歸著語である。「が」「を」は無視するのである。つまり彼等は何故に「は」の事實を無視するかの意である。故に「は」は動詞を動詞のまま體言化して他動格にしたのである。

一般格

「を」の無い客語 他動の客語は必ずしも「を」を要しない。「水飲んではいけない」「大鼓敲く」「水」「大鼓」などのやうに使ふことも平易な疎略な言語に往々有る。こういうのは格は

他動格ではなく、一般格である。

この一般格は音便で長音になることが有る。「火い點ける」「飯い食ふ」「匂う作る」「靴う履く」「毛え切る」「酒え飲む」など。撥音は長音にならない。又ア列オ列で「花あ見る」「碁を打つ」などいふのは他動格……をの音便であらう。

他動格の音便 平易な疎略な言語に於てはアイウオの四列の音の下では「を」が音便を成すことが有る。その規則は

1 ア列音は「を」と共にア列の長音になる。花を(見る)——はなあ、田を(植ゑる)——田あ。

2 他音の下イ列音は拗音オ列の長音になる。月を(見る)——つきおキョー。これは單音では音便にならない。例「火を」は「ひお(ヒョー)」とならない。

3 他音の下ウ列音はオ列の長音になる。菊を(見る)——きくお。「つ」は「つお(ツォー)」となる。例、靴を——くつおクツォー。

4 他音の下オ列音は長音となる。床を(のべる)——とこお(トロー)、子を(生む)——こお(ロー)。

エ列音の下では「を」が東京語では音便にならない。然るに地方に由つては「酒を」を「さきよ」と云ひ「店を」を「みしょ」といふ様に拗音オ列の長音になる處が有る。東京語にはこの法は全くない。

音便

「を」「を」の用法

「を」「を」の用法 客格 依據格 客語

依據性動詞

動詞の一種に依據性の動詞といふものが有る。例へば

連詞		連詞	
客語	歸著語	客語	歸著語
舟に	乗る	机に	凭れる
家に	居る	國に	在る
舟へ	乗る	机へ	凭れる
外へ	出る	國へ	歸る

右の例の「乗る」「凭れる」「居る」「在る」「出る」「歸る」は依據性の動作を表すものである。「乗る」は舟とか車とか馬とか必ず何物かに依據して行はれる。依據せずには唯乗るといふことは出来ない。「凭れる」は物に依據し「居る」「在る」「出る」「歸る」は場所に依據する。しかし動詞自身は依據する動作を表すだけで依據の客體をば他語からの供給に須たなければならぬ。右の例の「舟に」「机に」「家に」「國に」「舟へ」「机へ」「外へ」「國へ」は依據の客體を表すもので客語である。之を依據の客語といふ。その格を依據格といふ。客格の一種である。「に」と「へ」は他に依據せられる事物を指定する助辭である。他に依據せられる事物は之を

依據格

「に」「へ」の區別

依據物ともいふべく即ち依據作用の客體である。

「に」と「へ」の區別はどうか。凡そ依據物と依據の作用との關係に發生關係と存在關係と進行關係との三つある。

イ 酒に醉ふ	雨に濡れる	火事に驚く	……原因	發生
ロ 東京にゐる	日本にをる	彼處に在る	……場所	存在
ハ 七時に起きる	午前に出掛ける	今日中に來る	……時間	
ニ 東京へ行く	國へ歸る	此處に來る	……場所	
＊ 今日へ及ぶ	過去へ溯る	明年に至る	……時間	進行

場所と時間とは存在關係の依據物にもなり進行關係の依據物にもなる。

「に」は右の表に於けるが如く發生、存在、進行の三種に互つて一般に用ゐられる。故に「に」の附いた依據格は一般性の依據格である。「へ」は右の表に示す通り進行關係に於てのみ用ゐられる。發生、存在の二つには用ゐられない。「……へ」の格は進行性の依據格である。發生、存在、進行の三別は作用と依據物との相互の關係の三別である。故に「行く」「走る」「逃げる」等の進行的動作でも

地震に郊外へ逃げた

日曜に芝居へ行つた

の「逃げた」は「地震」に對しては發生的關係である。「行つた」は「日曜」に對しては存在的關係である。何れも進行的關係ではない。たゞ「郊外」「芝居」に對してのみ進行的關係である。依據物に對して進行的關係を取り得る作用は「行く」「来る」などの様な某處より某處へ進行移動する作用だけである。即ち「へ」を用ゐ得る場合は進行的作用の場合だけである。進行的作用の場合に限り進行的關係の客語は「に」「へ」の何れをも用ゐ得るのである。その場合「に」を用ゐるが善いか「へ」を用ゐるが善いかに就いて、その區別を説く必要が有る。

東京語に於ては進行的意義が顯著な場合には必ず「へ」を用ゐる。「に」は決して用ゐない。

東京へ行く

國へ歸る

此處へ来る

中へ這入る

他處から東京へ移動するのである。他郷から國へ移動するのである。決して「東京に行く」とは云はない。「東京に行く」は文語又は近畿以西の言ひ方である。

進行的動作でもその進行的意義が注意されずに單にその進行的作用と依據物との關聯する點にのみ注意され得る性質の作用が有る。例へば

席へ着く

都へ住む

人に頼む

人に物を預ける

手へ持つ

頭にかぶる

足へ履く

舟へ乗る

こゝういふ動作は進行的動作ではあるが進行を考へずに進行の結果だけを考へると依據物との關係が存在關係になるから「に」を使ふ。「席へ着く」は他處から「席へ移る」のであり、「席に着く」は席へ移つた結果「席に居る」のである。兩方言へるのであるが其の區別を無視してはならない。通例の習慣では

〔人、物〕

〔處、部位〕

馬に乗る

馬の背中へ乗る

舟に乗る

舟の真中へ乗る

人に物を遣る

人の處へ物をやる

人に本を貸す

人の處へ本を貸す

人に頼む

事務所へ頼む

役人に願ふ

役所へ願ふ

人情に訴へる

裁判所へ訴へる

水に流す

川へ流す

依據物が右の上段の様に人や物ならば存在關係として「に」を用ゐ、依據物が、下段の様に處や部位ならば進行關係として「へ」を用ゐる。特に

馬へ乗る 舟へ乗る 人へ遣る 人へ貸す

などと云ふのは「馬」「舟」「人」を場所扱ひにしていふのである。「彼の人へ頼む」などいふと彼の人の處へ頼み込む様に聞えるから事が大袈裟に聞える。「物を机の上へ置く」などは置く位置を主として言へば「に」を用ゐ、置く方向(置く先)を主として言へば「へ」を用ゐる。「へ」は疎略な語では音便で「い」となることがある。此處に來る「學校に行く」などといふ。但し「ん」の下では「い」にならない。

以上に説いた「に」「へ」の別は東京語に就いていふことである。文語では漢文訓系の言ひ方では「へ」は用ゐない。古文系の文語では進行さを一點的に明示せずに廣く其のあたりを指す場合にのみ「へ」を用ゐる。天へ行かばながまに「東の方へ行きけり」越の國へまかるなどの類がそうだ。場所は廣くても、一つの廣い處と考へて一點的に指すならば「天に行く」「東に行く」である。

近畿以西の方言では、「へ」を用ゐずに全部「に」を用ゐる處が多い様である。國定教科書も

方言の依據格

「に」「へ」の文語の別

「へ」の音便

「に」「へ」の「さ」の語源

「私のうちにいらつしやい」「學校に行く」など東京語と違つた云ひ方をしてある。東北地方の方言では東京語の「へ」を「さ」といふ。「東京さ行く」「二階さ上る」など。

「に」の語源は「の」と同じであらう。「の」が連體的であるのを連用的にして「に」といふのであらう。(第三三頁「の」の參照)

「へ」の語源は名詞の「方」である。「方」は「海へ」「山へ」の如く場所を指すものである。「知るべ」「童べ」「語部」「忌部」などの如く用ゐるのはその方の人を廣く指すのである。

東北方言の「さ」は「様」の意の「さ」である。文語では「此方さまに走り來る」の如く「さまに」と云つたのであるが、東北方言では「さ」が「に」の意を含んだのである。「さま」は「様」と書くが、元は「嬉しさ」「遠さ」などの「さ」へ「懲りすま」などの「ま」が附いたので、「さ」「ま」「清げ」「清み」「侘しら」などの「げ」「み」「ら」などと兄弟の語であつて、何れもその様子を曖昧に指す語である。(第一三三頁參考)

一般格

依據の客語は常則として依據格を用ゐる。しかし粗樸な語では

僕明日から學校行くの。

の「學校」の様に「へ」なしに依據の客語になることがある。この「學校」の様に格の助辭なし

に斷句中に用ゐられる格を一般格といふ。場合により「學校を」の意「學校に」の意等種々の意に用ゐられる格である。

「に」「へ」の特別な用法

「に」「へ」の特別な用法 「に」「へ」を附けた客語の下に依據性の動詞が在るのは極めて普通な用法であるが、その外には特殊な用法が有る。

一 距離を表す名詞は進行性が有る。そういうものが進行的意義に用ゐられれば「……へ」といふ客語に對して歸著語になり得る。

この橋から東へ三十間を自動車の置場とする。

この「三十間」は一間二間三間と數へて行く意味に於て進行的である。

凡ゆる名詞は、物を主として考へずその作用を主として考へた場合はその作用が依據的ならば「……に」「……へ」を受ける。

三番さんへ御電話

竹に雀

「御電話」は電話の懸る作用を表し、「雀」は雀の止る作用を表す。

二 凡ゆる名詞は物を表すが、人が其れを他の物へ附加するとして考へた場合は人間の考へへの「附加」の意義が他の物へ依據するから「……に」を客語に取る。

酒に煙草は身體によくない。

帽子に靴が新しい。

「煙草」はその考へ方に於て酒に附加する取扱に在る。こういうのを單に二物の並列と考へ「に」を接續詞と思つてはならない。「に」は何處までも客語の記號であつて、その客語は附加作用に對する客體を表はし、附加的に考へられた名詞に對する客語である。こういうのを主觀的客語といふ。物に對しては客體ではない。考へに對して客體なのである。

三 動詞でも體言化して用ゐれば「に」が附く。

日が當つてゐるのに雪が降る。 まだ早いのに起きる。

の「」は動詞が體言化されてゐるから「に」が附いて依據格になる。動詞の體言化とは敘述の結果を一つの實質として物の様に考へることをいふ。やはり動詞であつて詞ではない。右の例は「」は「ふさはしくない」といふ形式に考へられ「」はそのふさはしくないことに對する客體を表すのである。これも主觀的客語である。

動助辭の「に」 動助辭の「に」(ニ活)は往々依據格と誤解される。

卵が鳥になる 山が雲に見える 風が靜かになる 息子を醫者にする

の「」の様なのは一致格の客語であつて依據格ではない。

動助辭「に」と違ふ。

「まで」は名
助辭、副助辭

「まで」は名助辭、副助辭。「學校まで行く」などいふ「まで」を「へ」と同様に格助辭と説く人が多いが私は「まで」は名助辭或は副助辭であつて格助辭ではないと思ふ。

イ 二月から四月までが春だ

ロ 朝から晩まで勉強する

ハ 親兄弟までが馬鹿にする

ニ 其處まで讀めばよくわかる

などの「まで」と「學校まで行く」の「まで」とは別の「まで」ではない。此等の「まで」は凡べて完辭の下へ就いて全體で一名詞を成す名助辭又は全體で一助詞を成す副助辭である。「——」だけが一名詞又は一助詞になる。

(イ)の「——」は主格で主語である。(ロ)の「——」は名詞性副詞であつて修用語である。所謂連用的修飾語である。客語ではない。

「學校まで行く」の「まで」も(イ)の「まで」と同じ用法である。「學校まで行く」の「行く」に別に客語が要らないのは行き先がわかつて居るからで「學校まで」が客語な爲ではない。若し客語を補へば「學校まで其處へ行く」である。「學校まで」は「行く」といふ動作の範圍をいふので「行き先」をいふ爲の語ではない。それは次の例でわかる。

私は昨年九州へ福岡まで行つた

同じ言ひ方

私は彼の本を百頁まで讀んだ

「行つた」の客語は「九州へ」である。「福岡まで」はその動作の範圍を示すだけである。客語ではない。(第三頁の「から」參照)

「から」の用
法

「から」の用法 客格 出發格 客語

出發性動詞

動詞の中には出發性の動作を表すものがある。之を出發性の動詞といふ。

雨は天^{△△△}から降る井^{△△△}から水が出る海水^{△△△}から鹽を取る圖書館^{△△△△△}から本を借りる

出發の客語

の「——」は出發性の動詞である。其の上の「△△△」は動作の出發點を表すものであつて下の動詞に對して客語である。之を出發の客語といふ。下の「——」は上の「△△△」に對して歸著語である。

出發格

「から」は體言へ附いて出發の客語となるべき資格の有ることを示す助辭である。「から」の附いた格は之を出發格といふ。出發格は客格の一種である。

動詞中には本來出發性を持つてゐる動詞も有るが臨時に出發性を帯びる場合も有る。

内部から崩れる

此方から見渡す

貴方から傳へて下さい

卷首から教へる

の「——」は普通の場合には動作の出發點を考へない動作であるが、特に出發的の作用として考へた場合には出發性を帯びて出發の客語を取るのである。

名詞へ續く
「から」

出發性を持つものは動詞ばかりではない。名詞でも出發性を帯びる場合がある。

角^{△△△}から三軒目^{△△△}が私の家です。

あ^{△△△}の山^{△△△}から向う^{△△△}は縣^{△△△}が違ふ。

簀^{△△△}から棒^{△△△}。

棚^{△△△}からぼた餅^{△△△}。

「三軒目」は一軒目二軒目三軒目と數へて行く進行性が有る。「向う」は見渡して行く進行性がある。「棒」「ぼた餅」は靜止した棒、ぼた餅ではなく、運動してゐる「棒」「ぼた餅」である。「棒が出る」「ぼたが落ちる」の省略ではないが、そういう意味を含んでゐる。名詞は靜止的に考へた事物ならば出發性はないが、事物そのものが運動性の觀念であれば出發性の動詞と同様に出發の客語を取つて歸著語になる。

九^{△△△}時から五^{△△△}時までが就業時間である。

の「五時まで」は名詞であるが、十時十一時十二時……四時五時と進行して行く進行性觀念であるから出發の客語を取つて歸著語になる。そうして「九時から五時まで」の全體は進行的名詞になる。しかし顛倒して「五時まで九時から」と云つては一名詞にはならない。「五時まで、九時から執務する」と云ふと「五時まで」は「執務する」に對する修用語となる。だから「から」と「まで」とは性質が違ふ。「から」に對するものは「へ」である。「から」も「へ」も客格の助辭であるが、「まで」は名助辭である。

理由の「から」

「から」は體言へ附くのである。名詞に附くばかりではない。動詞へも附く

冬は日^{△△△}が短い^{△△△}から^{△△△}なんにも出來ない^{△△△}。

の「」は動詞(體言化してゐる)の出發格である。之を理由の出發格といふ。動詞の第四活段の體言化の出發格は理由の出發格になる。下の「」は臨時に出發性を帯びた動詞であつて「」を客語にして之に對して歸著語である。「」なる理由から「」なる斷案が出るのである。

怠^{△△△}けた^{△△△}から^{△△△}して^{△△△}落第^{△△△}した^{△△△}のだ。

の「」は理由の出發格で「して」に對する客語である。「して」は實質的意味のない動詞で之を形式動詞といふ。この「して」の意味は「結果して」の意である。

夕^{△△△}方^{△△△}になつて^{△△△}から^{△△△}出^{△△△}かけました^{△△△}

の「」は動詞の方法格(「て」の附いたもの)が實質化して體言(名詞ではない)となつたもので其れへ「から」が附いて出發格となつたのである。

卒業^{△△△}が出來た^{△△△}にして^{△△△}から^{△△△}が就職口^{△△△}が有る^{△△△}まい。

僕^{△△△}が行く^{△△△}からには^{△△△}唯^{△△△}は置^{△△△}かない^{△△△}。

「其の上」の
意の「から」

の「――」は動詞の體言化の出發格が再び體言化したもので、「が」が附いた方は主格となり、「に」の附いた方は依據格となつたものである、この「から」は「……から以上」といふ様に「以上」の意を含んでゐる。

「から」は文語では「より」を用ゐる。

「から」の語源は名詞の「から」である。萬葉の「河からしさやけるらし」などいふのは河の性質上さやかであるに相違ないの意で、其の物の性質上から派生する或るものを表す。今日「國がら」「人がら」「家がら」などいふのもこれである。上に「の」が有つて「河のから」といふ様になつたのは「のから」が轉じて「ながら」(河ながら)となる。

理由の出發格の「から」は中國地方には「けえ」といふ處が多く、九州には「けん」といふ地方が多い。

京阪地方では「から」を「さかい」といふ。

毎日雨が降つて外へ出られんさかい困りやす。

などいふ。「さかい」は「そやか^イから」である。「そや」は「そうちや」「そうだ」の意である。「さかい」は「界」ではない。「さかひ」と書いてはいけない。

「から」の文語

「から」の方

「と」の用法

「と」の用法 客格 與同格 客語

「と」の用法、――動詞に對して客語になる。

動作形容の中には、獨りでは出来ない、必ず對手を要するとして考へられる動作形容が有る。

人 ^{△△} と争ふ	敵 ^{△△} と闘ふ	外人 ^{△△△} と結婚する	志士 ^{△△△} と交る
此れ ^{△△} と違ふ	其れ ^{△△} と合ふ	彼れ ^{△△△} と同じ	此れ ^{△△△} に近い

の「――」などがそうだ。こういう動詞を與同性の動詞といふ。その上の「△△」は之に對して客語を成すもので之を與同の客語といふ。其の格は客格の一種であつて之を與同格といふ。「――」は上の「△△」に對して歸著語である。

「と」は與同格の記號である。名詞へ附いて與同性の動作形容の對手を指示する助辭である。動詞には右の「――」の様な本來與同性を持つてゐるものも有るが、臨時に與同性を帶びるものも有る。例へば

明日貴方^{△△△}と何處か遊びに行きませう。

臨時の與同性

與同格

與同性の動詞

昨日は一日あの人と飲んだ。

遊びに行くのに必ずしも對手は要らないが、この場合は遊びを共にする意を含んで臨時に與同性を帯びるのである。

與同の客體即ち與同者には對抗者と共同者と二つある。「人と争ふ」などの「人」とは對抗者で「人と飲む」などの「人」とは共同者である。對抗者を客語に取るのは多く本來の與同性で共同者を客語に取るのは多くは臨時に帯びた方の與同性である。

「と」の用法、二、——名詞に對して客語になる。

「と」を受け

る名詞

「と」の附いた與同格は名詞に對しても客語になる。

君と對手は誰だ。

昨日君と親友が來たよ。

の「——」は名詞であるが、動作形容の意を含んでゐるから、その含んでゐる與同性に對して上の「君と」が客語になる。

「と」の用法、三、——接續的用法

接續の「と」

「と」の附いた與同格に妙な用法が有る。

日本と英國は嶋國である

海と山に遊ぶ

「と」の對用

「日本と」は「英國」に對する客語である。この場合の「英國」といふ概念は、單なる概念ではなく、その考へ方に於て日本といふ概念を對手として「しよに考へた概念である。」「日本と」は一しよに考へるといふ考へ方の與同性に對して客語を成すのである。「英國」といふ概念そのものゝ客語ではない。概念の運用(考へ方)に對する客語である。故に主觀的客語である。猶「日本に英國」といつた場合の「日本に」が「英國」といふ概念の考へ方に對して依據の客語になるのと同様である。又

日本と英國とは嘗て同盟國であつた。

などいふ場合も有る。客語に於ては變りはないが、歸著語に「と」が有る。この「英國と」は「日本」といふ概念の考へ方に對する客體として考へたのであるが、「日本」といふ概念は既に前言に表されてゐるから再びこれを考へなくても「英國と」が了解されるから「英國と」の内部へ含まれてしまふ。そこで「英國と」は實質化して一名詞を成すのである。下の名詞に「と」の有るのと無いのとは意味のぐはひが少し違ふ。

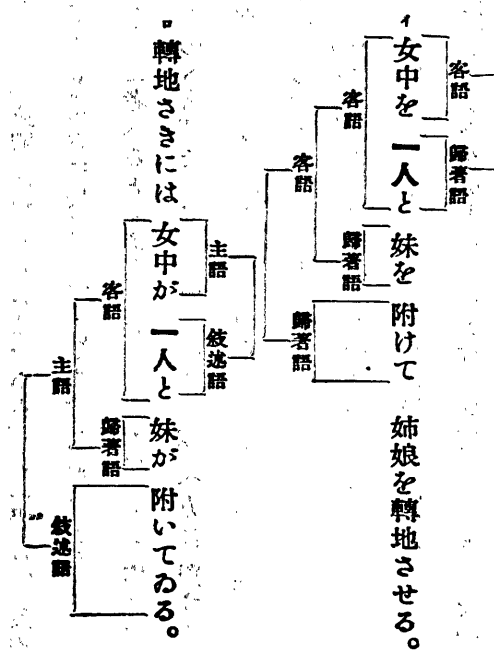
日本と英國とはどちらが堅實か。——比較對照

日本と英國は兩方とも嶋國だ。——合一

通用し得ないことはないが、下に「と」が有れば一旦二つに分けられて比較される。合一的に使ふにしても一度分けた上で合一するのである。下に「と」がなければ合一される。たとへ比較に用ゐても明に別けて比較する意にはならない。混合してゐるものを比較する様な無理が有る。

數詞と名詞との接續

「と」の用法、四、——動作性を帯びた數詞へ附く接續的用法
『三』の用法の更に妙な用法が有る。之を『四』とする。

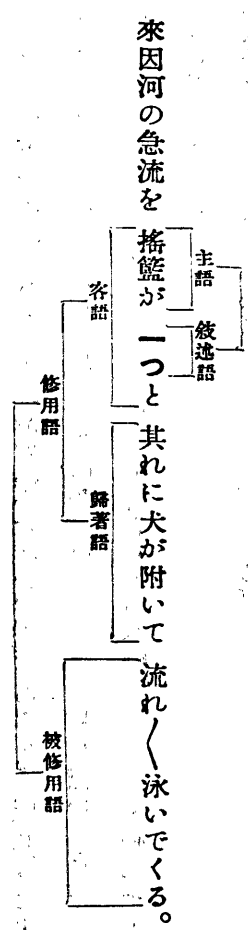


①の「一人」は唯女中の數ではなく姉嬢へ附ける所の「一人」であるから「附ける」といふ意の動作性(他動性)を帯びる。「附ける」といふ意味を以てして「女中を」といふ客語を取る。そうしてやはり名詞であるから「と」が附いて與同格になる。「妹」は單獨に考へられた妹でなく女中一人と共に考へられた妹であるからその考への與同性に對して「一人」といふ與同の客語を取る。

②の「一人」は姉嬢に附くとしての一人であるから「附く」といふ意の動作性(自動性)を帯びて「女中が」といふ主語を取つて敘述語になる。敘述語になつても名詞であるから「と」が附いて與同格になる。

名詞と動詞とを接續する「と」

「と」の用法、五、
これは前よりも更に妙な用法である。



「搖籃が一つと」の下が名詞であるならば前例(四)のと同様であるが下の「其れに犬が附いて」は名詞ではなくて動詞である。だから下の語へは「と」の附け様が無い。その下の「流れ泳いで来る」には主語は無いが、主體は搖籃と犬との合體したもので、判つてゐるから主語を言はないのである。

動助辭「と」

動助辭の「と」動助辭の「と」は全く別のものである。

官吏となる

教員と見える

風を雨と聞く

花を白雪と思ふ

日本といふ國

義經と名のる

そうだといふ

違ふと答へる

などの「と」は「〇、と、〇、〇、〇」と活用する動助辭の「と」である。格を示す靜助辭の「と」と混同してはいけない。(第一章一〇三頁)

「より」の用法

形容詞の區分

「より」の用法

客格

比較格

客語

事物の状態の考へ方には、單にそうであるそうでないと區分的に考へるのと、考へる基準を設け基準に比較して相對的に考へるのと二種ある。例へば「山は高い、谷は低い」と考へ「馬は大きい、鼠は小さい」と考へるのは區分的である。状態を高と低とに區分し、大と小

形容詞の比較格

比較の客語比較格

とに區分して考へたので「大」「高」の程度、「低」「小」の程度などには關係なく大は大、高は高である。高くなければ低く、大きくなければ小さいのである。形容詞のこの用法を區分態といふ。

淺間山は箱根より高く、富士山より低い。

犬は猫より大きく、馬より小さい。

など、考へた「淺間山」「犬」の「高い」「低い」「大きい」「小さい」は、高低大小の程度を「箱根」「富士」「猫」「馬」といふ基準(尺度)を以て計つたので、この考へ方は比較的相對的である。その「高い」「大きい」とは單に「低」「小」の反對をいふのではなく、其の程度をいふのである。形容詞のこゝにいふ用法を比較態といふ。

状態の考へが比較的相對的である場合にはその程度を示す基準が必要である。右の前の「△△(箱根より、富士山より、猫より、馬より)」は皆高低大小の基準を表すもので、下の「――」に對する客語である。こゝにいふ客語を比較の客語といひ、そうして比較の客語となるべき格を比較格といふ。

助辭の「より」は體言へ附いてその體言が比較格に在ることを示す記號である。

比較格の客語に對して歸著語となるものは通常、形容詞又は形容性の語である。例へば

汽車より速い

牛より遅い

海より深い

針より細い

花より綺麗だ

岩より丈夫だ

犬より敏捷だ

春より暖だ

動作詞でも狀態的に考へられた場合は同様である。

獨逸人は日本人より勉強する。

敵より味方の方が驚いた。

米國の方が歐洲諸國より金がある

本人より見てゐる人が泣いた。

名詞でもその含む狀態的意味に於て比較の客語の歸著語になることがある。

此れより上はもう有りません。

神武天皇より前は神代だ。

こゝういふのは「何々より」が直ちに名詞へ續くのである、他語の省略と見るべきものではない。

あらゆる名詞は之に「だ」を附し又は「だ」の意味を持たせ、之を「優る」といふ意に用ゐれば皆比較格の客語を取り得る。

花より圓子(だ)

負つた子より抱いた子(だ)

「圓子」は物を表すばかりでなく其の物が花よりまさる意である。

「より」の原義

「より」は口語では専ら比較格の記號であるが文語では出發格にも用ゐられる。蓋し「より」は元は出發格の記號であつた。それを比較格にも利用したのである。例へば「富士山は御嶽より高い」などの例でも、最初の意義に溯れば「高い」といふ狀態が御嶽を起點として出發するといふ言ひ方である。それが今日では原義を失つたまでである。故に比較はその性質上出發の形式にも表はし得る。それは

富士山は御嶽から見るとずっと高い。

などの例でも明である。又場合に由れば與同格の形式にも據り得る。

富士山は御嶽とはずっと高い。

勿論これらは比較ではあるが比較格ではない。依然としていは出發格は與同格である。

「より」は奈良朝では「よ」「ゆ」「ゆり」など、云つた。語源は「緩」「許す」「遣る」「寄る」などの

「ゆる」「よ」と同じであらう。「ゆるやか」「ゆるす」などの様に「自由」の意から「發生」「出發」の意となり、轉じて比較の意となつたものであらう。漢文の「出發」の意のある前置詞「自」「由」と同じ精神であらう。

「より」の語源

「の」の用法

「の」の用法 連體格 主體的連體格 連體語

普通の用法

連體語

連體格

私の父^{△△△}君の處^{△△△}朝の御飯^{△△△}夏の休み^{△△△}東京の真中^{△△△}家の前^{△△△}夏の初め^{△△△}犬の牡^{△△△}學生の一人^{△△△}藏書の全部^{△△△}人のため^{△△△}自分のこと^{△△△}

の「△△」は下の「」の事物の所屬を表すために「」の上へ冠したものであつて、之を

「」に對する連體語といふ。その格は連體格である。下の「」は之を體言語といふ。

體言語

連體の意義

連體といふことは、初學の人に説くには「體」は名詞であるとして連體とは名詞の上へ連る意だと説けばちよつと通入り易いが、嚴密に言へば「體」とは實體であつて運用を「用」といふのに對する概念である。連體とは他語の意義の實體へ連るといふ意である。(第卅一頁参考)

連體語となるものは三種有る。その一は右の例の如く體言へ「の」の附いたもの、その二は動詞の第四活段で「散る花」「立派な人」の「散る」「立派な」の類、その三は副體詞で「或る人」「その家」「或る」「其の」の類である。格は皆連體格である。

「の」は體言へ附いてそれが連體格であることを示す助辭である。前例の「△△」は皆「の」が

附いて連體格になつてゐる。

「の」は名詞へ附くのが主な用法であるが、名詞でなくても凡べて一つの實質として用ゐられた語へは皆附くのである。

1 故郷へ歸つての秋

宜しいとの御一言

2 貴方への御返事

東京からの便り

の(1)の「」は名詞ではなく動詞であるが一つの實質として取扱はれてゐる。(2)の「」は名詞ではあるが無格の名詞ではなく既に格の有る名詞が一つの實質として取扱はれてゐる。名詞であつてもなくても一つの實質として取扱はれてゐるものを實質詞又は體言といふ。「の」は體言へ附くのである。名詞へ附くとは限らない。

「の」の用法、二、——體言へ附いて事柄の主體を表す。

主體的用法

1 月の出る頃

雨の降る日

の「」は動詞であつて或る事柄を敘述してゐる。そうして上の「△△」はその事柄の主體を表してゐる。事柄の主體を表すのであるから之を主語に換へて「月が」「雨が」「……」の如く言つても意義は通ずる。しかし「△△」は主語とは違ふ。やはり連體語である。主體を主體

として表すのではなく主體を以て事柄の所屬を表すのである。だから「が」を用ゐずに「の」を用ゐる。「月の出る」は「月が出る」ではなく、月といふものに就いての其れの「出る」を表すのである。故に主格と云はずに主體を表す連體格と云ひ、その用法を連體格の主體的用法といふ。但し普通の文法書は之を主格と混同してゐる。

連體格の主體的用法は主語に代へて用ゐられるが、その格は主語の如く自由ではない。その用ゐられる場合は次の四つである。

「の」が主體
を表す場合
の四種

1 風の靜な夜

風△△の無く月の善い晩

文法△△のよくわかる人

2 彼奴のつうくしいには驚く

返事△△の晩くて愛敬△△の無いが缺點だ

家の遠くて往復に時間△△のかゝる人
主人△△の歸るをまつ

3 主人の不在の時

原籍△△の他府縣△△の方は戸籍謄本が要る

4 彼奴の馬鹿には愛相が盡きる

(1) は「△△」を受ける語「——」が「靜な」の様に自ら動詞の連體格を成すか、又は「遠くて」の様に自らは連體格でないまでも結局下に連體格の語(かゝる)の有るものである。

(2) は「△△」を受ける語が「づうくしい」の様に動詞性名詞であるか、又は「晩くて」の様に自身は動詞性名詞でなくても下に動詞性名詞(無い)の有る場合。

(3) は「△△」を受ける語が名詞でありながら敘述性を帯びて動詞の様に用ゐられ「の」が附いて連體格になつてゐるもの

(4) は(3)の「・・・」が更に名詞になつてゐるものである。「馬鹿」は「馬鹿なの」の意である。

文語に在つては連體格の主體的用法が口語よりも遙に自由である。「花の散らば」「花の散りたり」などの様な用法も有る。

連體格の主體的用法に次の様な場合が稀に有る。

切符△△の切らない方

帽子△△の忘れた人

宿題△△のまだ出さない人

願書△△の出した方

これは「△△」が「——」の動作の客體を表してゐるから「△△」は「切符を」「帽子を」といふ様に考へられるので客體的用法とも見られる。前には私もそう思つた。しかしやはり主體的用法である。主體に大小の二つが有つてその小主體を言はないのである。

切符△△が、私が之を切らない

帽子△△が、人が之を忘れた

方言の「が」

も「名」も「根」も「筏」も皆物(人、事物、草木、矢)に屬するものを指す概念である。これが一方では助辭の「の」となり一方では助辭の「に」となつたものであらう。

助辭の「の」が形式名詞の「の」と同源であることは別に證據がある。文語では「君が爲」「妹があたり」などの様に「が」は「の」と同様連體格の助辭である。そして方言の中には「が」を形式名詞として用ゐる地方がある。例へば

〔土佐〕 私のが
〔遠江〕 貴方の帽子は高いが
〔磐城〕 私のが
私のが
は安う。

の「——」は「私の物」の意である。「私」の直ぐ下の「の」「が」は連體格の助辭でその下の「が」「の」「の」は形式名詞である。「が」が助辭と形式名詞との二様に用ゐられることは「の」も同様に二様に使はれることを證する。東京では「私の」とはいはない。「私」といふ。「の」「一つで助辭と形式名詞とを兼ねる。それは名助辭の一種である。文語でいふ「ある人の曰く柿本の人腹がなり」などの「が」は格助辭の實質化である。

用言の格助辭

用言の格助辭
辭
用言と動詞

用言とは簡單に言へば動作詞と形容詞との二つを指すのであるが、嚴密に言へば動作詞や形容詞でも體言である場合は用言ではない。例へば「咲く花」「高い山」の「咲く」「高い」は用言であるが、「家へ歸つての朝」「起きるから寝るまで」の「歸つて」「起きる」「寝る」などは體

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第二節 格助辭

二六五

右の「泣いて」「酒を用意して」は「話す」「客を待つ」といふ動作の方法を表すものである。そして「泣いて」「酒を用意して」もやはり動作である。自己も動作でありながら他の動作の方法になる。甲動作が乙動作の方法として之に従屬するのであるから、甲動作と乙動作とは合體して一つの動作である。

甲動作が乙動作の方法である場合に甲の動詞の格を方法格といふ。助辭の「て」は方法格を示すものである。

方法といふ語は廣義に解釋されなければならない。意志的に目的に對して行はれる方法のみ指すのではない。前例の様な有意の方法の外に次の様なものをも方法といふのである。

雨が降つて 花見が出来ない。

西の方に用事が有つて 昨日東京を出發致しました。

此の靴は小さくて 穿けない。

運動場が廣くて 野球でも何でも出来る。

右の「——」は下の「——」の理由を表すものであるが、これもやはり方法である。自然の方法である。即ち人爲の方法ではなく天爲の方法である。天が降雨といふ方法を以てして人

の花見を出来なくしたといふ風に考へれば善い。之を單に理由と考へてはならない。理由と考へては「雨が降つて」と「雨が降るから」との區別が就かない。我々は「て」の意義を研究しなければならない。「て」は方法と理由を表すとのみ考へてはならない。方法と理由とに一貫する概念を求めて之を「て」の意義としなければならない。そうして方法と理由とに一貫する概念は廣義の「方法」である。理由と解するにしても「て」が理由の凡てを表すのではない。廣義の「方法」としての「理由」だけを表すのである。「雨が降るから」と云つても「花見が出来ない」の理由にはなる。しかしそれは「て」の表す理由とは違ふ。「て」の表す理由は何處までも方法としての理由である。

方法格は事件の経路——通り路——を表すのである。「泣いて話す」に就いて言へば「話す」といふ動作は「泣いて」といふ動作を経由して行はれる。「雨が降つて花見が出来ない」に就いて言へば「花見が出来ない」といふ事柄は「雨が降る」といふ事柄を経由して發生する。そうしてこの經由するすぢ路を我々は方法といふ。方法は「しかた」である。「爲方」を「爲り方」と解すれば尙明瞭になる。

「て」には完了の意味が有る。故に多くの場合に於て「て」の上の動詞は動作が先に行はれ下

の動詞は動作が後に行はれる。例へば

先件 後件

國へ歸つて 農業をやる

人を見て 法を説く

の如く解せられることが多い。しかし文法上完了といふのは實際の事件の完了を指すのではない。事件の觀念を完了的に取扱ふことをいふのである。故に先件後件は觀念の取扱方に於ける順序であつて事件の先後と必ずしも一致しない。

父が大將になつて 同時に子が大佐になつた。

隣は金が有つて 内は貧乏だ。

の「——」とは事件は同時であるが觀念は「——」は方法で「——」は事柄であるから

「——」は先件である。文語に於ては、

林間酒を煖めて 紅葉を焼く。 白居易

法場を脅して 石秀二階を跳る。 忠義水滸傳

の様な場合も稀に有る。事件は「——」の方が後である。しかし思想から言へば酒を煖める

「て」と動助
辭の「て」

「て」の接續

「て」の音便

といふ豫想が理由になつてその爲に紅葉を焼くのである。酒を煖めようと思ふことが前件で紅葉を焼くといふ動作は後件である。方法格の意義は觀念の取扱方の方に求めなければならぬ。

「て」に完了の意義が有るからこれから文語の完了の動助辭の「つ」が出来た。「つ」は靜助辭の「て」を下二段活に活用させたものである。世には方法格の「て」を動助辭「て、て、つ、つる、つれ」の第二活段と思ふ人が有るが、それは違ふ。動助辭の「て、て、つ、つる、つれ」は各段とも口語に用ゐないが、靜助辭の「て」は文語にも口語にも用ゐる。

「て」は動詞の第二活段へ附く。しかし活用によつては「て」の附かないものがある。即ち無名の形容性活用(「こう」「そう」「あ」「どう」「いかゞ」及び否定の「ず」)へは附かない。

「て」の音便 「て」が附くと四段活系の活用はサ行を除く外は必ず音便を生ずる。第五頁に説いた通りである。この場合にハ行の語の「て」が附いた場合の音便の假名は「ふ」を用ゐないことは呉れくも注意すべきである。「思ふて」「問ふて」「言ふて」などの「ふ」は皆「う」の誤である。特に注意を要する。

近畿中國邊では「長うて」「早うて」「可笑しうて」などの様にク活シク活の「く」に音便を用ゐ

るが東京語には決してないことである。

中部地方にサ行の「し」に音便を用ゐて「許いて」「指いて」「押いて」などいふ習慣があるが、東京語には決してない。

「にて」の約
音「ん」

「にて」の約音 「て」が「ニ活」の第二活段へ附いた「にて」は口語では必ず約音で「で」となる。例へば「靜にて」「遙にて」「東京にて」は「靜で」「遙で」「東京で」である。この「で」は動助辭か靜助辭か。敘述性が有るから勿論動助辭である。然らば活用はどうか。それは「ニ活」に屬するものであつて活段は普通の活段たる五活段の外である。活用は動助辭に因つては五活段外の活段も有る。もとく「にて」の約音であるから、その格は方法格である。他の動助辭に皆此の活段が有るならば第何活段となるべきものであるが、他の動助辭にない活段であるから單に五活段外の活段と稱して差支ない。その用法は動助辭の條で説くべきものでは有るが格としての用法が靜助辭の「て」と同様であるから「て」の處でも説くべき點がある。(第二七七—二二頁參照)

文語の「で」と近畿語の「ん」

靜助辭の「て」を帶びた動助辭は文語には否定の「で」が有る。普通の説では「すて」の約音とされてゐるが、私は古文の否定の「に」と方法格の「て」との約音だと思ふ。「に」は「言はむす

べせむすべしに」などの「に」である。「にて」の約音が「で」となることは「活の」に於て既に明である。否定の「に」と「て」でも音の上から言へば「活の場合と同様である。今、畿内中國邊には「行かいで」「知らないで」などの如くいふ「いで」が有る。これも普通の説では「行かすて」「知らすて」などいふ「すて」が「いで」となつたと稱せられてゐるが、私はやはり「にて」が「いで」となつたものと思ふ。「行かいで」「知らないで」は「行かにて」「知らにて」である。その「に」は否定の「に」である。古く否定の「ぬ」は「な」に、す、ぬ、ね」と活用したのである。「ず」は「ぬ」の鼻聲を失つたものである。(第二七頁参照)

「して」の音便 ク活シク活の方法格には二通りの言ひ方が有る。

- | | |
|-------------|------------|
| 1 遠くて困る | 高くて買へない |
| 2 遠くつて困る | 高くつて買へない |
| 1 苦しくて堪らない | 新しくて心持が善い |
| 2 苦しくつて堪らない | 新しくつて心持が善い |

(1)は單に第二活段へ「て」が附いたものであるが、(2)は第二活段へ「つて」が附いてゐる。(1)

の「つて」は「して」の音便である。文語で「遠くして」「苦しくして」などいふ處を口語では「遠くつて」「苦しくつて」といふのである。「し」はもと「爲」であつてサ行變格の動詞の第二活段である。それが漸次動詞としての力を失つたものである。文語に於ては、

こゝにして家やもいづく、白雲のたなびく山を越えて來にけり。萬葉集三七

などの「して」は意義は形武的であつて「あつて」に通するが、動詞には相違ない。それが「遠くして」「苦しくして」などとなると助辭化せむとする過程に在るものである。そこで同じ「遠くして」の「して」でも古いのはまだ助辭ではないが新しいのは助辭になつてゐると見るべきものである。

「ては」「ても」「て」の下へ「は」「も」の附いたものに二通りの用法が有る。その一は、

1 神田へ行つては本を買ひ、銀座へ行つては帽子を買つた。

神田へ行つても本を買ひ、銀座へ行つても本を買つた。

などの様な用法で、「て」の下に單に「は」「も」が有るだけで、「て」の意義は「は」「も」の意義へ分つてゐれば單純に了解される用法である。こゝにいふ「ては」「ても」「は」「て」「と」「は」「も」「を」を別々に説くことが出来る。其の二は、

假定の「て」
は「ても」

2 大阪まで行つては日歸りは出来ない。
彼んな悪い人と交際しては大變な目にあひます。

大阪まで行つても日歸りが出来ます。

彼んな悪い人と交際しても注意してゐれば大丈夫です。

などの様に假定の意を帯びる。之を假定の方法格といふ。

(1)には假定の意がなく(2)には假定の意が有るから「は」「も」の用法が違ふかといふと、善く考へれば「は」「も」の用法に違ひが有るのではない。何となれば「て」の用法に既に假定の意の有る場合と無い場合とが有るのである。

明日は日曜ではありませんよ。お節供だつて、學校休んでいけませんよ。

明日はお節供だから、學校休んでかまひません。

これらの「て」は假定的である。前例の(2)は假定の「て」へ「は」「も」が附くまで「は」「も」そのものは(1)と變りはない。

しかし注意すべきことは假定の「ては」「は」は必ず束縛を感じる場合困る場合にのみ用ゐることである。右の例で言へば「日歸りは出来ない」大變な目にあふ「何れも困る場合である。都

「ては」の意
義の辨

第六章 辭助辭(附、頭助辭) 第二節 格助辭

二七三

第六章 辭助辭(附、頭助辭) 第二節 格助辭

合の善い場合には決して用ゐない。

「あんなに怠けてはきつと落第する。」

「あんなに勉強してはきつと優等生になる。(用ゐず)」

(1)は用ゐるが(2)は用ゐない。若し(2)の様に言つたならば他を嫉んでその人が優等生になつては此方が困る意と思はれる。

「ては」と
「ても」

「ては」「ても」「にて」の約音の「で」「の」「へ」「は」「も」が附く。これも、

私の村でいまだ舊曆を用ゐて居ります。

などの様な單純な方法格と、

「いまう十二時か。十二時では大變だ。」

「十二時でも一時でも驚くことはない。」

などの様な假定的方法格とある。やはり假定の「ては」「は」は都合の悪い場合にのみ使ふ。唯換擲に用ゐる「それでは」は都合の好惡に拘らずに用ゐて、

それでは失禮します。

「ば」は用言たる動詞の下へ附いて其の動詞が拘束格と稱する格に在ることを示す静助辭である。

貴方の病氣は酒をやめれば直ります。

明日若し天氣が悪ければ出發を延期する。

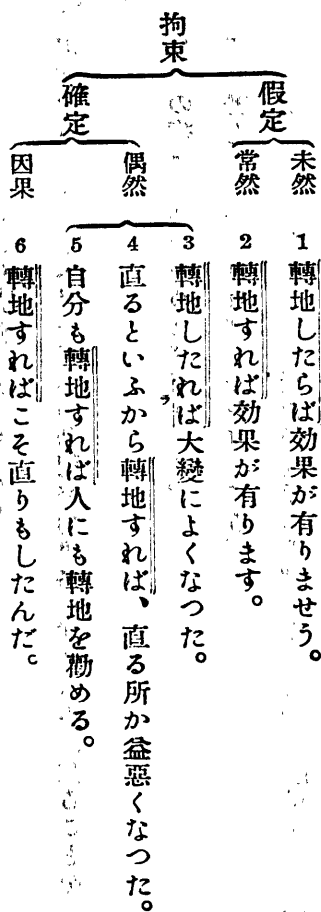
の「——」とは合體して連詞的動詞である。そうして「——」は「——」の表す事柄の發生の機會を表す。酒をやめるといふことが病氣の直ることを規定し、天氣の悪いことが出發の延期を規定する。即ち「——」は「——」を誘發するのに必要な條件とされ、放さない様に拘束把持される。故に之を拘束格といふ。「ば」は拘束格を表す助辭である。

「ば」は一般の動詞に於ては第五活段へ附くだけであるが、動助辭の「なり」「たり」に於ては第一活段と第五活段と兩方へ附いて「ならば」「たれば」「なれば」「たれば」となる。

文語に於ては一般の動詞の第一活段へ「ば」が附いて「行かば」「起きば」「遠くば」などと云つ

たのであるが、口語では「行けば」「起きれば」「遠くれば」とは云ふが「行かば」「……」とは言はない。「行かば」「……」の様な言ひ方は、方言、例へば静岡長野山梨等には、残つてゐるが、東京語には残つてゐない。但しク活シク活に於て「善くば」「宜しくば」「無くば」の三つだけは東京にも遺物的に残つてゐる。しかし「遠くば」「近くば」「白くば」「早くば」「……」等一般の形容詞にはこの言ひ方は東京語にない。

「ば」の用法には假定と確定との二種が有る。しかし世の文法家の間には假定と確定との區別に誤解が有る。次の區別に對して讀者の特に注意せられるやうに望む。



右の(1)(2)は假定で(3)(4)(5)(6)は確定である。善く讀んで貰ひたい。(1)(2)は轉地するか轉地し

ないかに關しては全然述べて居ない。轉地するかしないかをば決めずに置いて、その轉地した場合を假定するのである。故に(1)(2)は假定拘束格である。然るに(1)を假定とし(2)を確定とする人の有るのは餘り馬鹿げた誤といふべきである。(3)(4)(5)(6)は轉地したことを述べてゐる。故にこれは確定である。「ば」は第一活段と第五活段とへ附くがそれは假定確定の區別ではない。右の例に示す通り(1)だけは「ば」が第一活段へ附いてゐるが(2)以下は皆第五活段へ附いてゐる。

假定は二種有る。(1)を未然と云ひ(2)を常然といふ。(1)は轉地するといふ動作を未來へ想像して、その實現される場合を豫想するのである。また轉地しないがこれから轉地といふことがあらはれて來るとして假定するのである。故に之を未然假定といふ。(2)は轉地を未來へ假定するのではない。時と關係のないものとして一般時へ假定する。故に之を常然假定といふ。(1)は特定の場合に就いて具體的にいふのである。其の時だけに就いて轉地の有効をいふのである。(2)は一般の場合に就いて抽象的に言ふのである。時と場合とに拘らない恆久不變の規則をいふのである。

(2)は轉地に適當なる患者一般に對していふのである。(1)は其の患者一人に就いて言ふのである。勿論「貴方は轉地す

れば直ります」といふこともあるが、それは一般患者に對する療法を其の一人に言つたので、やはり「一般患者に共通な規則である。又「そういふ病人は轉地したらば直りませう」ともいふが、其れは人は一般であつても場合は一一般ではない。今實際その人が轉地するしないの問題の有つた場合にいふのであつてそんな場合は特定の場合である。轉地するしないの實際問題が全然無くて、漫然、轉地すれば直るしなければ直らないといふ様な場合には決してそんな言ひ方はしない。苟くも「轉地したらば」といふのは、さし當つて轉地するしないの問題の有つた場合に限るのである。

(1)は「ば」を第一活段へ附け、(2)は第五活段へ附ける。但し口語では「ば」が第一活段へ附くのは「たり」「なり」の二つに限るのであるから、文語の様に「轉地せば」とは言へない。必ず「たり」「なり」を用ゐて「轉地したらば」「轉地するんならば」といふのである。「ば」が第一活段へ附くか第五活段へ附くかは假定と確定との區別ではない。未然假定と其の他の拘束格との區別である。

(3)(4)(5)(6)は皆確定である。確定に偶然と因果との二種が有る。

(6)は因果確定である。因果とは原因結果の關係をいふ。轉地したことが原因で直つたことが結果である。この場合は「ば」を體言の出發格助辭「から」に換へて

轉地したからこそ直りもしたんだ。

と云つても類似した意味になる。しかし(3)(4)(5)は「から」とは云へない。

偶然確定の三種

單純な偶然

反豫期的

俱存的

(3)(4)(5)は皆偶然確定である。偶然とは因果の關係を認めないものをいふ。偶然確定に(3)(4)(5)の三種有る。(3)は單純な偶然確定で必ず「たれ」の下へ「ば」を附ける。文語では動詞へ直ちに「ば」を附けるが口語では必ず「たれ」を要する。

(4)は「たれ」無しに動詞へ直接に「ば」を附ける。この場合は之を反豫期的といふ。轉地した場合の結果に關して或る豫期(直るといふ豫期)を持つて居り、そうしてその豫期が裏切られたことを表すのである。轉地したならば直るだらうと思つて轉地したのに却つて惡くなつたのである。反豫期は偶然の一種である。

(5)は二つの事件の並列に用ゐる。之を俱存的といふ。自分が轉地したからとて必ずしも人に勧めるとは限らないのでその間に必然の關係はない。故に二つの事件の俱存は偶然の關係である。この俱存的偶然確定に於ては「も」といふ助辭を對用して「自分も……人にも……」の如くいふのが普通であるが必ずしも「も」を要するのではない。

神田邊の豫備學校には、教場で帽子を冠つてゐる奴が有れば、着流しの奴が有る。

丸で禮儀も何も有りあしない

右の「」は俱存的の偶然確定拘束格であるが「も」はない。

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第二節 格助辭

二七九

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第二節 格助辭

二八〇

「ならば」の二種
「たらば」の二種

「ならば」「たらば」の二種 「ならば」「たらば」は單に「なり」「たり」の第一活段へ「ば」が附いたものと思つてはいけない。「ならば」「たらば」には次の説明の如く各二種有る。

「なり」「たり」の二つに限り「ば」が第一活段と第五活段との兩方へ附く。

特別ラ行變格 (日本、靜か)	なら	なり	な	なれ
特別ラ行變格 (書い、思つ)	たら	たり	た	たれ

第一活段へ「ば」が附けば「ならば」「たらば」であるが、それを「なら」「たら」といふことが多い。「ば」が音便で「あ」になり更に消えたのであらう。

第五活段へ「ば」が附けば「なれば」「たれば」であるが、これは極めて嚴肅な語では「なれば」「たれば」といふが普通の語では其れが音便で「なれあ」「たれあ」「たれあ」「たれあ」となり、更に「なりや」「たりや」となつた過程を経て、今日では「なりや」「たりや」が約音で「なら」「たら」となつた。「なら」「たら」は既に「ば」を含んでゐるのであるが、「ば」が顯れてゐないから、「ば」の意義を明にするために更に「ば」を附けて「ならば」「たらば」といふことも有る。そこで「ならば」「たらば」にも「なら」「たら」にも各二種有ることになる。一つは第一活段の「ならば」「たら」「たらば」「たらば」で一つは第五活段の「ならば」「たらば」「たらば」「たらば」である。その

區別は意義に由る外はない。即ち未然の意ならば第一活段でそうでないならば第五活段である。「たらば」「ならば」に各二種有ることは東京人には一寸分り惜いかも知れないが方言の研究は明に之を證する。東京人は氣が附かずに區別してゐるのである。

「行かば」と「行けば」の區別は静岡縣人などには自分の平素の口語だから善く分る。同時に第一活段の「なら」「たら」と第五活段の「なら」「たら」との區別も分る。それは第五活段の「なら」「たら」は遠州邊の老人間に「なれあ」「たれあ」といふ語が残つてゐる。

昨年東京へ行つたれあ昔とは丸で變つてゐた。

東京も賑やかなれあ大阪も賑やかだ。

などの如く用ゐる。これが若い人の語では「行つたら」「賑やかなら」となつてゐるがその言ふ心持は老人の「たれあ」「なれあ」と全く同じである。さうして未然の場合には、

東京へ行つたら二重橋を拜みなさい。

自分の子ならそんなことあ出來まい。

の如く「たら」「なら」と云ひ、決して「たれあ」「なれあ」とは云はない。若い人の語では兩方とも「たら」「なら」であるが其の心持は「行かば」と「行けば」との間に存する區別と等しい區別

「ば」の用例

別が有る。

「ば」の用法の例

1 未然假定拘束格

東京へ着いたら一寸知らして下さい。(着いたらば)

雨が降つたら日を延ばしませうねえ。(降つたらば)

貴方だつたらどうなさいます。(貴方だつたらば)

落第しようものなら大變だ。(ものならば)

君の煙草か、それなら一本貰はう。(それならば)

行くんなら行くとお言ひなさい。(行くんならば) 「ん」の音便

2 常然假定拘束格

東京へ着けば必ず知らせが有る。

努力すればその効果が現れずには居ない。

値段が高ければ買ひ手が少ない。

凡そ物は品が上等なら値段が高い。(凡そ物は品上等なれば値高し)

「たれば」は常然假定に使はない。

次の様なのも常然假定である。

しやうが有りませんよ、一寸甘い口を開けばすぐこの通りなんですもの。

昨日一日不在をあければ、店中さぼつて居るんだよ。

こういうのは實際の事柄をそのまゝ述べずに、其れから發見された法則(假定的斷定)を述べ、聽者をしてその法則を現狀に演繹させるのである。

3 偶然確定拘束格 (單純) たれば

昨年吉野へ行つたれば花が眞盛りだつた。(或は、花の盛りは過ぎてゐた。)

窓をあけたらちやうど月が出る處だつた。

行くのが少し遅かつたら、まう戸が締まつて居た。

「たれば」だけである。一般の活用第五活段へ附けた「ば」と「なれば」とは使はない。

4 偶然確定拘束格 (反豫期的) 一般活用第五活段へ「ば」を附ける。

誰かと思へば、君か。

來るといふから待つて居れば音沙汰無しだ。

雨だといふから傘を持つて出掛ければ日本晴だ。

この用法は②の常然假定の利用である。その豫期する點(待つて居れば必ず來る)は常然假定であるのを、其れを材料に使つてその反豫期を表すのであるから、前件と後件とは因果的關係を失つて偶然的關係となり、同時に前件が確定に變る。もとゝ常然假定の利用であるから「たれば」を使はないことは常然假定と同様である。

5 偶然確定拘束格 (俱存的) 一般の第五活段へ「ば」を附ける。

生徒も笑へば先生も笑ふ。

みかたも賞めれば敵も賞めた。

君も男なれば乃公も男だ。

これも②の常然假定の利用である。「生徒が笑へば先生も亦笑ふ」といふ様な常然假定では前件と後件との關係は必然的關係であるが、其の必然性を失へば前件(生徒が笑ふ)は假定的意義を失つて確定的意義となるのである。そうして前件と後件とは偶然的關係となり俱存的關係となる。この法に於ても「たれば」を用ゐない。何となれば「たれば」を用ゐない②の用法の利用であるからである。

(6) 因果確定拘束格

急げばこそ速達にするのだ。直ぐ出さなくてはいけないよ。

勉強したればこそ及第が出来た様なものゝ、とても一人前に行く私ではありません。彼を信用すればこそ清き一票を捧げたのである。

「ば」を必然確定に使ふことは、文語では常のことであるが、口語では下へ「こそ」が附いた時だけである。

「ば」は何故確定になるか。

確定的意義の發生 「ば」の原義は假定に在る。「ば」が因果確定に用ゐられる理由は三段

論法の解釋に由つて明瞭である。

〔大前提〕(1) 道が悪ければ歩き憎い。

〔小前提〕(2) 田舎は道が悪い。

〔結論〕(3) 故に田舎は歩き憎い。

〔縮小三段論法〕(4) 田舎は道が悪ければこそ歩き憎いんだ。

「ば」の本義は右の(1)の如く假定である。しかし(1)は抽象的な一般的の法則である。實際問題には觸れて居ない。實際問題として(2)なる事實に觸れた場合は(1)の法則が(3)の事實へ適用されるから(4)なる斷論を生ずる。換言すれば(1)の無い場合に於ては(1)は單に空なのであ

るが(4)が存する場合には空なので(1)に適用されて具體化する。其れが即ち(3)の中のである。故に「ば」の因果確定的意義は抽象的な假定的意義の具體化である。

「ば」の發生

「ば」の發生 「ば」はもと「は」である。「は」は「私」は「人」などの「は」である。「は」にはもと拘束の意義はない。唯題目を提示して彼と此とを分けていふものである。故に之を分説(「も」は合説)といふ。拘束放任の意味は動詞の第五活段に在るのである。古文には「ば」なしに、

否といへど語れ語れと告らせこそ志斐いは申せ、強語りとふ。萬葉集三三

の「」の様に使つてある。「は」なしに第五活段がそのまゝ拘束になるのである。その下へ分説の「は」(清音)を附けてその場合を他の場合と區別して言へば「語れ」と告らせはである。その「告らせは」の「は」は上の「せ」の韻を受けて濁音になる。それが「告らせば」である。かくして「ば」が出来、そうして拘束的意義の意識が半「ば」の方に移つたのである。是に由つて之を觀れば第一活段も文獻以前には「ば」なしに未然假定拘束格に用ゐられたものであらうと思はれる。

「ば」の音便及び約音

「ば」の變形 「たれば」「なれば」が音便で「たりや」「なりや」となつた時期の有つたこと及

び「たりや」なりや」が約音で「たら」なら」となることは前に言つたが、その外「ば」が第五活段へ附く時は疎略な語では一般の動詞に皆音便が有る。

行けば——行けあ(イキヤー)

言へば——言へあ(イヤー)

起きれば——起きれあ

善ければ——善けれあ

といふ様にエ列音の語尾が「ば」と熟して拗言ア列の長音になる。

「無ければ」善ければ「の二語に限り「無けあ」「善けあ」とも云ふが、これは「無ければ」「善ければ」の音便ではない。

「無ければ」「善ければ」の音便である。第五活段を「無け」「善け」と云ふことは萬葉から有る。又「無ければ」といふことを名古屋邊で「無けらにあ」といふのは「無からむには」の音便であり、遠州人が「無けにあ」といふのは「無けむたは」の音便であるから、これは別問題である。

第一活段と「ば」

第一活段と「ば」 文語では一般の活用に對して「ば」が第一活段へ附くのに、口語では「なり」「たり」の外は「ば」が第一活段へ附かない。しかし、「なり」「たり」は運用の廣い助辭であつて、口語の動詞は、「なり」「たり」を附けた上でその第一活段へ「ば」を附ければ、一般の動詞へ直接に第一活段へ「ば」を附けたのと等しい効果が得られる。

君歌を詠まば我批評せむ——詠んだらば

君が歌を詠まば我は詩を作らむ——詠むんならば

第六章 辭助辭(附、頭助辭)

第二節 格助辭

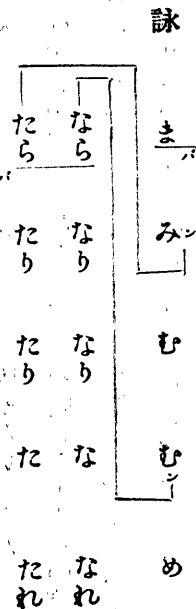
二八七

第六章 辭助辭(附、頭助辭)

第二節 格助辭

二八八

文語の「詠まば」は口語では「詠んだらば」「詠むんならば」である。



文語の「詠まば」には二様の意義が有る。完了の意を帯びる場合と帯びない場合とである。完了の意を帯びた「詠まば」は口語では「詠んだらば」である。完了の意を帯びない「詠まば」は口語では「詠むんならば」である。故に一般の動詞の第一活段へ「ば」を附けることは口語では廢れてゐるが、「たり」「なり」を介して第一活段へ「ば」を附けることに由つて補はれる。「詠んだらば」でもなく「詠むんならば」でもない「詠まば」といふもの全く無い。然らば文語で「詠みたらば」と云つたら「詠まば」と違ふかどうか。それは「詠みたらば」の方が「詠まば」よりも完了の意義が濃厚であるだけで、別段の違いは無い。

一般の動詞の第一活段へ「ば」を附ける用法は遠州などには残つてゐる。

貴方が歌を詠まば私は詩を作らす。

といふ。但し遠江で使ふのは非完了の場合だけである。完了の意の場合には「詠まば」とは言はない。

君が歌を詠まば私が批評せしむ。

と云へば「詠まば」は「詠むんたらば」の意となつて「讀んだらば」の意にはならない。

形容詞の第一活段へも「ば」を附ける。しかし「……くば」が必ず音便で「……かあ」となる。そんなに書かあ水でもあびなさい」など。勿論「書ければ」とは心持が違ふ。「書いんたらば」に近い。

「ば」が第一活段へ附いた用法に對する正しい意識は、多くの地方の人の間では麻痺してゐるが遠州人などは正當に維持してゐる。「一旦緩急有れば」と「一旦緩急あらば」との區別などは遠州人にはよく分る。内心勸語を文法上誤であるなど思ふ文法家は遠州から出ない。東亞高等豫備學院長松本龜次郎氏は遠州人である。嘗て遠江流の第一活段へ「ば」を附けることを標準語に加へることを主張した。しかし私は東京語に「たらば」ならば「の利用が有る以上何もそんな必要はないと思ふ。

「と」の用法

「と」の用法 拘束格 修用語

「と」は動詞の第四活段へ附いて拘束格を表す助辭である。用法が二つある。

拘束格

(1) 早く出掛けよう。人が來ると出られなくなるから。(來れば)

養生しないと 中々直りませんよ。(養生しなければ)

(2) 御出掛けになると 間もなく電話が掛つて參りました。(御田かけになつたら)

茶代を氣になると 急に待遇が變り出した。(氣ばつたら)

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第二節 格助辭

二八

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第二節 格助辭

二九

(1) は常然假定で(2)は單純偶然確定である。そうして意味が下の「……ば」に似てゐる。

「ば」「と」の別 常然假定を表す場合に「と」「ば」とどう違ふか、一言にして言へば「ば」は理論的で「と」は實際的である。例へば

甲 雨ふりに外へ出れば濡れてしまふ。

乙 こんな日に外へ出ると濡れてしまふ。

甲 誰でも酒を飲めば酔ふ。

乙 私は酒を飲むと眠くなる。

の(甲)は單純な理論である。出るか出ないかに關しては全く言はない。單に出れば濡れるといふのである。濡れるだけの理由が有るからである。その理論は過去の經驗に由つて歸納された知識であるにしても、單に歸納の結果を言ふのであつて、歸納の經路や經驗の由來から獨立してゐる。(乙)は理論ではない。實際である。濡れるだけの理由が有るか無いかは別問題であつて、理由はとにかく實際濡れるのである。經驗の結果を表しても經驗から獨立して居ない。經驗を背景として働いてゐる。

(甲)は「飲む」と「酔ふ」との關係の一般人に於ける因果的理論である。(乙)は「飲む」と「眠くなる」との關係の私一人に於

ば—理論的
と—實際的

ける實際である。勿論(甲)の「ば」と「と」を取り換へて、

(イ) 私は酒を飲めば酔ふ

(ロ) 誰も飲むと眠くなる。

(甲)の命題は理論を表すのである。歸納の結果である場合でも歸納の経路から獨立して居る。完全な抽象的知識であるからそのまゝ演繹論法の大前提になり得る。

〔大前提〕 人が来れば出られない。

人は飲めば酔ふ。

〔小前提〕 午後は人が来る。

人が飲んだ。

〔斷論〕 故に午後は出られない。

故に人が酔ふ。

(ロ)は歸納の結果ではあるが、まだ抽象化してゐない。まだ個々の經驗を含んでゐる。故にそのまゝでは演繹論法の大前提にはならない。酒を飲むと眠くなることは蓋然的であつて因果的な關係は不明だ。「外へ出ると濡れる」もその言ひ方に於ては蓋然的である。「外へ出れば濡れる」と言ひ得べき場合であつても之を控目に考へたのである。故に「と」を用ゐた次の三段論法は誤である。

〔大前提〕 私は飲むと眠くなる。

〔小前提〕 私は飲んだ。

〔斷論〕 故に私は眠くなる。(誤) 「眠くなりさうだ。(正)」

即ち大前提がまだ不十分である。「飲めば」ならば善い。

「ば」と「と」とはまう一つ相違が有る。それは「ば」はもと「は」であつて彼れと此れを分けて言ふ意が有る。「は」は分説の助辭であるが、「ば」も分説的である。「飲めば酔ふ」は飲んだ場合と他の場合とを區別して分けて言ふ意が有る。「と」は分説の意味がない。之を單説といふ。「ば」と「と」には分説と單説の別が有る。然らば「と」へ「は」を附けて「とは」としたらどうか。それは分説になる。しかし「とは」の「は」は「は」であつて「ば」ではないから分説の意が「ば」よりは鮮である。

イ 人は酒を飲めば酔ふ。

ロ あの人人は酒を飲むとはあはれる。

の二つに於て(イ)の「飲めば」は理論的であるから平素飲むといふ意味はなく、従つて屢飲む意味もない。(ロ)の「飲むとは」は平素に對する經驗を離れてゐないから、嘗て屢飲んだことが現れて居る、且つ分説の意が強いために飲む場合の各同數が一々羅列されて、飲まない場

合と分けられる。そこで酒を飲む毎にといふ意味が出て来る。地方に因つてはこの「とは」は用ゐない處も有るかも知れないが東京語では用ゐる。

うちの竹藪は、筍が出るとは折るから竹が一向ふえない。

彼の人は取るとは飲んでしまふ。

雨が降るとは休み雪が降るとは休み、遊んではかり居る。

漢文で「隨生隨採」「隨獲錢隨飲酒」といふ様な處である。

「と」「たれば」の別 單純偶然確定(二六頁^③)に於ける「と」「たれば」の區別はどうか。

「と」「たれば」の別

御出掛に〔なると〕間もなく御電話でした。

今朝は電車に〔乗ると〕乗つたら停電さ。

一週間ばかり雨が續いたんだ。〔そうすると〕井戸の水が濁り出したよ。
〔そうしたら〕

やはり分説の意味の有無が違ふ。そうして「と」の方は實際的であるから時間的に直ぐな場合に適當である。「たれば」の方は分説の意味が有つて主觀的であるから時間的には直ぐで

なくとも善い。

「と」の接續

「と」の接續 「と」は假定確定に拘らず一般の活用の第四活段へ附く。唯未來の「う」「う」「まい」、當然の「べき」、完了の「た」、斷定の「な」の下へは附かない。

「と」の語源

「と」の語源 「と」の語源はどうか。それは文語の「と」と同じである。文語でも口語でも「とはもと」「いふ」「ある」「する」「思ふ」などの意味のある動助辭である。第二活段だけではあるが、「○、と、○、○、○」であつて活用が有る。其れが文語で次の如く利用される。

穗にも出でぬ山田を守ると藤衣稻葉の露に濡れぬ日ぞなき。古今集^{三七}

あらしのみ吹くめる宿の花すゞき、穗に出でたりとかひやなからむ。蜻蛉日記^{三七}

の「守ると」は「守るとて」の意、「出でたり」とは「出でたりとも」の意ではあるものゝ、「と」はそうある場合を表すのである。「守ると」は「守るとする場合」「出でたり」とは「出でたりとある場合」である。されば「も」が附いた「とも」は「そうある場合も」である。

思ふなど君は言ふともあはむ時何時と知りてか我がかこひざらむ。萬葉集^{二〇}

の「言ふとも」は「言ふ場合も」である。又「は」が附いて「とは」となれば「そうある場合は」である。

つれもなき人をやねたく白露の起くとは嘆き寝とはしのばむ。古今集
の「は」は「起きる場合は」寝る場合は」である。「は」がなくても、

朝もよし紀人美しも、待乳山行き來と見らむ紀人ともしも。萬葉集
の「行きくと見る」は「行くとは見、來とは見る」意でつまり「行くとある場合は見、來るとある場合は見る」である。

それならば次の様に言へるであらう。

酒を飲んだ場合にも酔ふまい——酒を飲むとも酔はじ

酒を飲んだ場合にはあはれる——酒を飲むとはあはれる

酒を飲んだ場合に眠くなる——酒を飲むとねむくなる

そういう様な譯で口語の拘束格の「と」が出来たものである。

「と」「とも」
の用法

「と」「とも」の用法 放任格 放任終止格

放任格

「と」「とも」の用法、一、——放任格

「と」「とも」は普通の用法では専ら未來の動助辭の「う」「よう」「まい」の下へ附いて放任格と

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第二節 格助辭

二九四

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第二節 格助辭

二九五

稱する格を表す。

賣らうと 賣るまいと 持主の勝手だ。

誰が來ようと 恐れることはない。

人が何と言はうとも 私は平氣だ。

たとひ落第しようとも、病氣では試験に出られない。

人は怠けようと 乃公は勉強する。

右の「は」は放任格である。放任格は或る事柄を、他の事柄の發生を阻止するに足らないものとして之を放任するものである。即ち他の事柄を誘出する機會たるに足らざることを表すのである。彼の拘束格がその事柄を必要だとして把持するの、反對である。

人が怠ければ 乃公も怠ける。

拘束

人は怠けようと 乃公は勉強する。(怠けない。) 放任

の「は」「は」の發生の機會として拘束把持せられ、の「は」「は」の存在を阻止せず、その機會として不必要であるとして放任される。

「と」「とも」の表す放任格は假定放任格である。拘束格には假定に未然、常然の別が有るが

口語の放任格にはその區別がない。但し文語の放任格にはその區別がある。

「ともはもと」と「へ合説の」もの附いたものであるが、既に「とも」といふ一助辭を成してゐる。

「と」「とも」は口語の普通の用法では専ら未來態の動詞「……う」「……よう」「……まい」の下へ附く。一般の動詞へは附かない。しかし文語では一般の動詞へ「と」「とも」が附いて「行くとも」「見るとも」「遠くとも」「……など言ふ。却つて未來態の「……む」「……じ」の下へは附かない。

特別な用法

「とも」に特別の用法があつて一般の動詞の第四活段へ附く。

死ぬとも 生きるとも 勝手にするが善い。

下宿へ行くとも 寄宿舎へ這入るとも 御自由^{カマヘナ}に爲さい。内ではもう御忙^{まじ}は出来ませぬ。

「」の下には皆「善し」「構はない」の意を持つ語——「が有つて、」「はこれを修飾する。この用法は「……とも」と「……とも」を二つ以上對用する。たゞ「となりともしろ」「何れとも自由だ」などの様に疑問詞を使ふ場合は多數の總括になるから「とも」を對用するに

は及ばない。「何れとも」は「何れなりとも」である。「何れとも」を「何れも共に」と解してはならない。この用法の「とも」は斷定の動助辭の「なり」へは第三活段へ附く。且つその場合は必ずしも「とも」を對用しない。

自分が行かれないければ使を遣るなりとも なさい。

そうして「とも」は「と」でも善い。

「と」「とも」の語源は次の「つて」の處で説く。

「とも」の用法、二、——放任終止格

「とも」には第二の用法が有る。之を放任終止格といふ。

「女でも富士山へ登れませうか。」登れますとも。近頃は女學生が盛に登りますよ。」
「先生、宅の子供は學年試験に大丈夫でせうか。」大丈夫ですとも。少なくとも中の上でせうなあ。」

「とも」は、事柄が、疑ふには餘り確實である意である。普通「勿論」と解釋する。しかし文法的に解釋すれば放任的終止格である。

活用の第五活段は放任許容の意が有るから之を放任形といふ。その放任許容の意味から命

令の意味も出るし、「ば」ども」を附ければ拘束格、放任格にもなるし、文語では「こそ」の結として放任終止格にもなる。

今朝見れば夜の嵐に散りはてゝ庭こそ花の盛りなりけれ。金葉集六二

み垣守衛士のたく火の夜は燃えて晝は消えつゝ物をこそ思へ。阿花集三〇

こういふ第五活段は意味が強調されてゐる。何故に強調されるか。それは放任されるからである。『庭が花の盛りであること、夜晝物を思ふことは顯著な事實である、争はれない事實である、私の敘述でこれを曲げることは出来ない、故に私は私の敘述を事實の有のまゝに任せる、決して我が主観的判断を以て直観を左右しようとはしない』といふ風に、敘述を直観に一任(放任)するのである。そこで意味が強いことになる。故に之を放任終止格といふ。

口語の「とも」を附けた終止格は文語の第五活段の終止格と同性質のものである。放任の意味は活用の第五活段にも在るが、第五活段へ附く動助辭の「ども」にも有る。「視れども見えす」と云へば視ることが放任されてゐる。「見えす」といふ判断を下すのに視る視ないは構はないといふ意である。「構ふ」と言へば拘束で構はないと云へば放任である。放任の意は第

五活段にも「ども」にもあるが、第三活段へ附けた「とも」にも有る、「視るとも見えす」の「視るとも」も放任である。そこで「視るとも」は他語の上へ使へば放任的の修用語(連用的修飾語)になるが、「花をこそ視れ」などの様に終止的に使へば放任的の終止格になる。『「視る」といふ事柄が顯著な事實であつて之を拒むことは出来ない、故に「視る」といふ判断を私が主張するには及ばない、私の敘述は事實に一任する』といふ意になる。

そこで「とも」を附けた放任終止格は第五活段の放任終止格と同じ性質の終止格になる。しかし違ふ點は有る。それは「……とも」の方は敘述全體の放任であるが、第五活段の方は上に「こそ」が有つて、その「こそ」の附いた事物又は事柄に關する部分的の放任である。その點が違ふ。「花が散りますとも」と「花こそ散れ」との相違は其處に在る。たゞ「こそ」の附いたものが敘述の全體を代表する場合には稍近くなる。「さうですか」といふ問の答として「さうですとも」と「さこそあれ」とは稍近い。それは「さ」が敘述全體を代表するからである。「とも」が放任の意から勿論の意になるといふことの證據はもう一つある。それは地方に因つては「とも」の代りに「とて」やその音便「つて」を用ゐることである。

「まだ雪が降るでせうか。」まだ降るよて。雪はこれからだよ。」

東京語ではこの「とて」は使はない。

「とも」は放任格の場合は必ず未來態の動詞「……う」「……よう」「……まい」の下へのみ使ふが、放任終止格の時は終止的に用ゐ得る一切の第四活段へ附く。又

「明日伺つても善うござんすか。」えゝ入らつしやいとも。

「日給を上げて貰はうではないか。」そうとも、是非上げて貰はうよ。」

の様な用法は「」が無活用化して無活用動詞となつたものである。「とも」は稀に無活用動詞へも附く。

「つて」の用法

放任格 修用語

「とて」の音便

「つて」は「とて」の音便である。「とて」はもととは活の動助辭の方法格であるが、口語ではその「とて」の音便「つて」が靜助辭に變つて放任格の記號となつた。そして一般の動詞へは附かず専ら完了の「た」及び斷定の「だ」の第四活段へ附いて「たつて」「だつて」となる。

たつて
だつて

特別ラ行變格	たら	たり	たり	た	たれ
特別ラ行變格	だら	だり	だり	だ	たれ

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第二節 格助辭

201

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第二節 格助辭

201

この用例を舉げると、

自動車を飛ばしたつて、まう追つ附くまい。

止めたつてだめだよ、人の言ふことを聽く人間でない。

誰に見せたつて耻しいことはない。

どう見たつて立派な紳士でせう。

あの氣質では病氣だつて休まないだらう。

飛行機だつて鳥の様には飛べまい。

幾ら丈夫だつて年には勝てません。

「つて」は「た」「だ」の下でなければ附かないが、凡ゆる動作動詞は「た」を附けた上で「つて」を附ければ放任終止格になる。又名詞や無活用形容詞は「た」を附けた上で「つて」を附ければ善い。

形容詞へ附く「たつて」

ク活シク活の形容詞へは「た」が附かない筈である。然るに次の様な用法が有る。

遠くたつて來ることは來るでせう。(遠くたつて)

難しくたつて勉強して覺えます。(難しくたつて)

欲しく。た。つて。そう。高。く。て。は。買。ひ。や。う。が。有。り。ま。せ。ん。(欲しく。た。つて。)

「た」はク活シク活へは附かないが形式動詞の「する」を附け、その第二活段「し」へ「た」を附ける。そうして「し」が音便で促音になる。「遠くしたつて」が「遠くつたつて」となる。その促音が更に省音便になると「遠くつたつて」が「遠くたつて」となる。「たつて」が直接に「遠く」へ附くのではない。「し」はサ行變格の形式動詞であるが意義は「ある」の意である。「此處にして家やもいづく」などの「し」と同義である。

「つて」の表はす放任格は假定放任格である。確定には用ゐない。

「つて」「と」の語源

「つて」「とて」の語源 「つて」は「とて」の音便である。「とて」主としては文語であつてト活の動助辭の方法格である。

ト活

〔散らす〕

○

と

○

○

○

「と」は或る作用の産果を表す動助辭であつて「云ふ」「する」「ある」「思ふ」などの意味を持つてゐる。故に「とて」は「と云ひて」といふ様な意味が有るが「云ひ」の省略ではない。「と」それ自身が言ふ作用の産果を述べて直接に「て」へ續くのである。

櫻花散らば散らなむ。散らすとて古里人の來ても見なくに。古今集

第六章 靜助辭(附、頭助辭)

第二節 格助辭

四〇四

第六章 靜助辭(附、頭助辭)

第二節 格助辭

四〇五

この歌の解釋に「とて」を「とても」と説いてはならない。「と云つて」と説かなくてはならない。「散らないかと云つて古里人が來て見るか、否來ては見ない。」である。「散らなかつて同じだ、古里人は見に來ないから。」と考へる人は古文の「とて」を知らない人である。それは口語の「とて」になる。文語の「とて」は方法格であつて放任格ではない。

此の文語の「とて」へ「も」を附けて「祈らずとも神や守らむ」といふ様にいふこともある。それは「とて」の合説態であつてやはり放任格ではない。が、放任格に近迫してゐる。後世はそれが放任格となつた。そうすると「も」がなくても放任格である。口語の「つて」はその音便たるに過ぎない。

「ど」「ども」

「ど」「ども」の用法 放任格 修用語

「し」「けれ」へ附く。

「ど」「ども」は確定放任格を表す助辭である。文語では一般の動詞へ附くが、口語では唯「けれ」の下へ附くだけである。「けれ」は第三三——三三頁で説いた通りク活シク活の形容詞の語尾の助辭化したものであつて

ク活〔行く、遠い〕

〔く〕

〔き〕

し

〔き〕

けれ

〔き〕

〔き〕

〔き〕

の如く活用する。東京語では第三活段の「けれ」と第五活段の「けれ」を使ふだけであつて、學問も有るし氣轉も利くけれども、人格が低い。

の如く使ふものである。一切の活用はその終止格になり得べき第四活段へこの「けれ」が附く。「けれ」へ「ど」どもを附け得る以上、動詞へ直接に「ど」どもを附けるとその効力は等しいのである。

「ど」どもは確定放任格であるが、その用法に因果と偶然との別が有る。

商賣は繁昌するけれども 其の割に儲からない。

善い處けれども 交通が不便で困る。

月は無いけれど 星の光で路はわかる。

の「」は因果放任格である、因果放任格は其の事柄が他の事柄の存在を阻止するに足るべき必然的關係のないことを表すものである。右の「」の放任を拘束に改め下の「」の肯定否定を反對にすれば、その拘束は因果拘束になる。凡そ放任を拘束に換へて因果になるのはその放任格は因果放任格である。

偶然放任格

次の例は偶然放任格である。

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第二節 格助辭

408

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第二節 格助辭

408

日光は秋も善いけれども 夏も惡くない。

あの人は文章も巧いけれども 詩も上手だ。

彼の學校は學生も澤山居るけれども 同時に屑も多い。

「」と「」とは二つの事柄が俱存するが、その間に必然的關係が存するのではない。全く偶然の關係である。偶然の意に、何故に「けれども」といふ放任格を用ゐるかといふと、其れは二者の俱存に對して前者を放任すれば因果ではあり得なくなるのである。「秋の善いことはさもあらばあれ、それも許す、そうして夏も善い」といふのであるから二者の關係は偶然である。

類似の語

類似拘束格と類似放任格

拘束格の助辭や放任格の助辭に似て非なる助辭が有る。

「」とは「」ともとは方法格の助辭の下へ提示助辭の「は」もの附いたものである。「」は拘束格に似てゐるが拘束格ではなくて分説の假定方法格である。「」は放任格に似てゐるが放任格ではなくて合説の假定方法格である。

「」は「」と

「ては」と
「ば」とと
の別

今「ては」と「ば」ととの區別をいふと

イ酒を飲めば誰でも酔ふ。

常然拘束格、理論的、必然

■酒を飲むと私は眠くなる。

常然拘束格、實際的、蓋然

ハ脚氣で酒を飲んで堪りますまい。

分説の假定方法格

(イ)「ば」と(ハ)とは區別は有るが何れも酒を飲んだ場合を表すのである。(ウ)「ては」は酒を飲んだ場合を表すのではない。酒を飲んだ事柄を、或る結果を起す點から言ふのである。場合をいふのと事柄をいふのと違ふ。(ハ)は酒を飲んだ場合に酔ふなり眠くなるなりするのであるが、(イ)は酒を飲んだことが、堪らないといふ結果を來すのである。(ウ)「ては」は事柄に重きを置くから、具體的にその事柄の存し又は存する恐れの有る場合に使ふ。故に

脚氣で酒を飲むんですか、脚氣で酒を飲んで堪りませんなあ。

の如くいふのに適當である。酒を飲みさうな場合に使ふのである、酒を飲みさうもない場合には用ゐない。

こう毎日降つては困りますなあ。

これ、そんなことをしてはいけません。

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第二節 格助辭

三〇七

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第二節 格助辭

三〇八

こう申し上げては失禮かも知れませんが……。

の「・・・」に注意して見ても、目前にその動作の有る具體的な場合であることが分るであらう。且つ前に言つた通り「ては」は必ず困る場合善くない場合である。

「ても」は假定方法格の場合に假定放任格と混じ易いが、「ても」には假定の意味は有つても放任の意味が無い。

イ 彼の方が仲裁したつて恐らくまとまりますまい。

ハ 彼の方が仲裁しても恐らくまとまりますまい。

(ハ)は仲裁が放任されてゐるが、(イ)は假定されてゐるだけで放任されてゐない。

「が」は主格である。動詞へ附いても「けれども」とは違ふ。

1 彼の人を尋ねたが不在だつた。

2 彼の人を尋ねた所が不在だつた。

「私の彼の人を尋ねた場合」が「彼の人の不在な場合」であつたの如く解すれば「尋ねたが」が動詞であつても主語であることが分る。これは内包的の主語でしかも主觀的主語である。右の(1)(2)の如く「が」を「所が」と云ひかへて見れば意味のぐはひが分るであらう。

「が」と「けれども」の別

「ても」と「たつて」の別

「から」と
「ば」の別

「から」は出發格である。「東京から」今日からの如く名詞へ附くばかりでなく、

イ 風が吹くから涼しい。

ロ 風の吹くよりして涼しきなり。(文語)

ハ 風が吹く所から大變に涼しい。

この「ハ」は動詞であるが名詞と同様出發格である。ロの如く云ひかへて見れば意味の
ぐはひがわかる。

「ので」は「の」へ「で」が附いたもので、「で」は方法格である。拘束格ではない。

1 雨が「降るの」で人出が少ない。 2 「降雨」で人出が少ない。

「降るの」を名詞の如く考へ、下の「降雨」と同様に考へれば「で」が第三九頁②の「で」であ
ることを知るのに難くない。但しこの「の」は體言性形式動詞であつて、名詞ではない。

「のに」は「の」へ「に」が附いたもので依據格の主觀的な用法である。

雨が降るのに低い下駄で出掛けた。

「降るのに」は放任格ではない。「雨が降るの」へ「低い下駄で出掛ける」といふ不似合な動
作の敘述がぶつつかつて行く意である。

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第二節 格助辭

1102

感動助辭

疑問、命令、
感動

疑問の意義

疑問の三種

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第三節 感動助辭

1103

第三節 感動助辭

感動助辭は廣義の感動即ち思想のぐはひを表すものである。所謂疑問、命令、感動等は廣
義の感動である。此の種の助辭には疑問の「か」「やら」、命令の「ろ」「よ」「い」「な」、感動の
「ぞ」「せ」「つ」「は」「わ」「や」「や」等がある。

「か」の用法 疑問

「か」は疑問を表す。疑問とは思想の一部に存する不明が將來解決の期のあるべきことを豫
想することである。單に豫想するだけならば之を「疑」と云ひ、豫想するだけでなく解決を
期待するならば之を「問」と云ひ、二つを總括して疑問といふ。

疑問には次の例の様に三種有る。

- 1 何時が日曜です。
- 2 明日が日曜ですか。
- 3 何時が日曜ですか。

材料の疑問

判斷の疑問

材料及び判斷の疑問

(1)は判斷の材料たる「△△」が不明なので、判斷たる「――」には不明はない。(2)は判斷の材料には不明な點はない。唯判斷そのもの、當否が不明である。(3)は判斷の材料にも不明な點が有るが判斷も不明である。

(3)を改めてその判斷の材料を指定して

明日が日曜ですか、明後日が日曜ですか、その翌日が日曜ですか、そのまた翌日が日曜ですか。

と枚舉的に問へば單に判斷の疑問の羅列であるが、(3)はその枚舉すべき材料を「何時が」と不明に言ふから、判斷の疑問と材料の疑問とを兼ねるのである。

「か」といふ助辭は判斷の疑問を表す助辭である。(1)の様に單に材料の疑問ならば疑問詞(例、何時)を用ゐるだけで「か」は要らない。判斷の疑問は(2)の様に「か」を要することは勿論であるが、(3)の様に材料と判斷との兩方の疑問である場合には、材料の不明を表すために疑問詞(例、何時)を用ゐ、判斷の疑問を表すために「か」を用ゐる。

(1)と(3)との區別を疎そかにしてはならない。(1)は不親切な疑問である。それ故後輩が長上に對して物を問ふ様な場合は甚だ失禮に無遠慮に聞える、なるべく(3)の様に下へ「か」を附

けるが善い。(3)は判斷の當否にも疑を挿むから遠慮した問になる。まう一つ注意すべきことは、極鄭重な遠慮した疑問には未來態の疑問を用ゐるべきことである。

明日は御在宅ですか。―― 明日は御在宅でせうか。

御意見は如何ですか。―― 御意見は如何でせうか。

見て下さいませんか。―― 見て下さいますまいか。

上段よりは下段の方が鄭重である。

「か」は體言へ附く。體言とは前にも言つた通り、名詞は勿論、動詞でもその意義が一實質として取扱はれたものをいふ。

1 今日「日曜」か。

あれは「誰」か。

2 花は「咲いた」か。

天氣は「善い」か。

3 御父さんは「内に御出」か。

御主人は「まう東京をお立ち」か。

4 彼の宿屋は「綺麗」か。

子供はどうだ「丈夫」か。

5 どうだ「まだ」か。

やあ「また」か。

6 立つのは「東京驛から」か。

着くのは「此處へ」か。

右の例の「」は一實質と見たものである。(1)の「」は名詞であつて一實質である。(2)は動詞であるが其れが一實質として取り扱はれてゐる。一實質として取り扱はれれば活用のあるものゝ或る活段も固定して無活用の譯になる。(3)は第四活段が固定して無活用化したものである。(4)は無活用の動作詞、(5)は無活用の形容詞で皆體言である。(6)は副詞だがこゝでは一實質として取り扱はれてゐるから體言である。(7)は客語になるべき名詞であるがこゝでは一實質として取り扱はれてゐるから「から」「へ」まで込めて一體言である。文語では疑問に「や」「か」の二つが有る。「有りや」「有るか」の如く使ふ。動詞が體言化せず、用言のまゝで用ゐられれば「や」「か」が付き、動詞が體言化されれば「か」が附く。口語では専ら體言化して「か」を用ゐる。

「や」と「か」

方言の「や」

疑問の利用

遠江邊には「や」が残つてゐる。相手の語が不明瞭であつた爲に急に反問する時などに使ふ。「御父様は何時出掛けた。」「まだ内に居る。」「内に居るや?」この「内に居るや」は「何、内に居るつて?」の意である。この「や」は通言で「え」ともなる。

疑問の利用に反轉、難詰、誘導、頓悟、假設、離接、不定等がある。

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第三節 感動助辭

三二

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第三節 感動助辭

三二

反轉、難詰、誘導

1 そんな馬鹿なことが有るかい。

そんな馬鹿なことが有るもんか。

反轉

2 君としてそんな勝手なことが言へますか。

そんな不都合なことが有りますか。

難詰

3 行かうちやありませんか。

さあどうだ、一つ始めるか。

誘導

これら何れも疑問を設けて對手の思惟を促すのである。(1)は此方の主張を徹すために對手の思惟の反省を促す形式を取つても、實質上は明瞭な斷言である。(2)も主張であるが、これは對手をして眞に反省せしめる。(3)は對手の意向を問うて賛成を求めるのである。

4 何だい、火事かと思つたら湯屋の煙か。

は、あ、今日は祭日か。

頓悟

あゝさうですか。

これは疑問を設けて自ら之を解決した形式に、自己の頓悟を表すのである。

此の膝一たび屈せむか、再び伸ぶるに期なからむ。(文語)

假設

頓悟

若し落第でもしませうか、親に合せる顔がありません。

これらは假設である、膝が屈するかどうかは不明であるが、その不明が膝が屈する方に決まつた場合を假設し、その假設に由つて言を立てるから、假設(屈したならば)の意になる。

電話を掛けるか、使を遣らなければならない。

井戸を掘り直すか、水道を引くかしたいものだ。

主人が来るか、番頭をよこして貰ひたい。

これは、論理學に所謂離接(選言)である。「」が成立するかどうか分らないのを、それがどちらかに決定されることを豫想し、一方が成立する場合には他の一方が成立せず、一方が成立しない場合には他の一方が成立することを表す。二つの假定が相侵することなく設けられたものである。

此の自動車は修繕に、まう、三百圓か懸つた。

あの人は何處かへ行つてしまつた。

こういうのを不定といふ。一度疑つて置いて更にその解決を抛擲するのである。「三百圓か」の様に數詞へ附けば數の不明確を表し、「何處か」の様に疑問詞へ附けば疑問が不定になる。

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第三節 感動助辭

二二五

離接

不定

「かい」と
「かあ」

「か」の實質
化

「か」へ感動の「よ」「は」が附いて出來た「かよ」「かは」が音便で「かい」「かあ」となることが有る。

そんな事が有るかい。

よく考へろ。今日が日曜かあ。

「か」の實質化 終止のしかたに表明的、疑問的、命令的等の區別が有る。判斷の疑問はやはり一種の終止である。その疑問的終止が單に疑問的終止に用ゐられれば其れは斷句の代表部である。

「さあ自分は將來何をしたら善いだらうか。」

今度の試験にはどんな問題が出ましたか。

の如く用ゐるのは其れである。

然るに疑問的に終止したものを、一つの材料、一つの實質、一事物として取り扱ふ場合が有る。例へば

「將來何をすれば善いか」が問題である。

「今度の試験にどんな問題が出るか」を考へてみる。

の「」は一度斷句になつたものを一名詞として取扱つてゐる。之を疑問的終止の實質化と

いふ。斷句を、斷句としてとなく一つの物として取り扱ふのである。譬へば米は食料品であるが船で運べばその場合は船の荷物である。船員の食料として積んだ米は食料であるが荷物として載せた米は食料ではない。食料ではあるが運ぶ點から言へば單に荷物である。疑問も前例の如くに於ては斷句であるが例の「」に於ては一名詞である。

疑問の實質化は必ずしも名詞となるとは限らない。

彼の人は今日「來ないか」も知れない。

いや御都合は有るでせう。「有るか」は知りませんが、私の方では黙つて聞いてゐる譯には參りません。

不十分終止

の「」は名詞にはなつて居ない。しかし實質化されてゐる。この場合は修用語である。

「か」の不十分終止 「か」が實質化されない場合は凡て疑問的終止である。しかし終止には完全な終止と不十分終止とある。完全な終止ならばそのまゝ一つの斷句になるのであるが、不十分終止の場合は斷句であつても他へ從屬する。

誰ですか、人が來て居ますよ。

一寸いらして下さい。子供が何だか變ですは。

何と思つたものか、いきなり掴みかゝつて來た。

右の「」は終止ではあるが。下の「」へ從屬してゐる。これを不十分終止といふ。終止には相違ないが一部分の終止であつて全體の終止ではない。右の最初の例でいふと「誰ですか」は下の「人」に就いての疑問である。即ち下の「」が本文で、「」は本文中の「人」の註解文である。註解文は本文に從屬する。註解文と本文とで全體であるから註解文だけに於ける終止は全體の終止ではない。註解文だけが終止してもその全思想はまた終止しない。そういう譯で不十分終止は終止であつても下へ從屬する。凡そ斷句が不十分終止である場合には之を不十分斷句或は從句といふ。英文典では之をクローズといふ。右の例は不十分斷句が他の斷句「」へ從屬してゐる。「」は完全な斷句である。然るに不十分斷句(……か)が斷句へ從屬せずに名詞なぞへ從する場合が有る。

並列と見え
る用法

珈琲か紅茶を下さい。

貴方には、醫者か、さもなくば辯護士が善いでせう。

の「」は下の「」なる名詞を註解してゐる。

「やら」も疑問であるが、問でなく疑だけである。或る不明が明白になるべき淡い豫想は有るが、毫もそれを期待しない。分らないことを分らないまゝで置くのである。

「やら」の用法は「か」と同じである譯だが、「か」の様に間に用ゐられないから獨立の終止に用ゐることは少ない。例へば

あの人は今日來るとは云つたが果して來るやら。

など、云ふことも稀には有るが、大抵は

來るやら來ないやら分らない。

と云ふ風にいふ。そうなればもはや獨立の終止ではない。「來るやら」も「來ないやら」も不分終止の實質化した修用語である。

「やら」の用法に疑はしいものが有つたら之を「か」に換へて見れば分る。唯意味から言つて「か」は問にもなるか「やら」は單に疑であるだけである。

「やら」に疑の意味さへ無い様に見えるのが有る。

玄關は靴やら 下駄やら 草履やらで一杯だ。

これらは混亂の甚しい意である。もとは靴だか下駄だか草履だか何れを何れとも見分けが附かないやうな亂雜をいふ意味から出來たので語源を言へばやはり疑意が窺はれる。

文語の「やらん」

「やら」は文語では「やらむ」といふ。平安朝の末あたりから出來た語であつて語源は疑問の「や」へ「ら」ともが附いて「も」が通音で「む」となり音便で「ん」となり、後世「ん」が消えて「やら」となつた。「ら」は不明確を表すもので「我等」の「等」、「らむ」の「ら」も「清ら」も「甘ら」などいふ「ら」も皆同じもので、さういふやうな様子を曖昧に表すものである。「も」は感動で、「はも」「なも」の「も」や「明しかねつも」などの「も」と同じものである。「やら」は疑問の「や」が様子の意の「ら」で弱められたものである。

「やらん」の語源を「にやあらむ」などいふ説が有るが私はそう思はない。

「ろ」「よ」「い」の用法

「ろ」「よ」「い」の用法 命令

「ろ」「よ」「い」の三つは命令を表すものである。

四段活系

凡そ命令は動作動詞の終止格にのみ存する一態である。さうして動作動詞の中四段活系の

活用は第五活段で命令を表すが、一二段活系の活用は活段のみを以てしては命令を表すことが出来ない。そこで第一活段へ助辭の「ろ」「よ」「い」を添へる。

「ろ」

「ろ」は對話に用ゐる純粹の口語の助辭である。上一段「見ろ」「起きろ」「藥を煎じろ」、下一段「蹴ろ」「受けろ」、上二段「爲ろ」の如く終止格の命令態を表す。カ行變格とサ行變格は「ろ」を附けない。

「い」

カ行變格は「ろ」の代りに「い」を附けて「來い」といふ。「い」は「よ」の音便である。

「よ」

「よ」は文語及び嚴肅な口語で用ゐる。上一段「見よ」、下一段「蹴よ」、サ行變格「爲よ」の如くいふ。カ行變格は口語では「來よ」といはない。やはり「來い」である。箱根以西の語では「ろ」を使はずに「よ」を使ふ。この「よ」は近畿以西では音便で「見い」「蹴い」「爲い」の如くなる。

凡そ命令は直接に對者に動作を命令する場合に、「いらつしやい」「遊ばせ」「下さい」などの様な尊稱の動詞ならば差支ないが、平稱の動詞の命令は通常失禮とされる。極めて親密な爾汝の間の外は非常に目下の人に對しても用ゐない。それが尊稱の動詞ならば構はないが、妙なことには尊稱の動詞は平易な語では皆四段系であるから「ろ」が附かない。「御覽じろ」「一つだけ尊稱」。「ろ」の附くべき、一二段活には、尊稱の動詞が平易な語には無い。そこで

「ろ」は失禮な語といふ感じを生ずる。

「ろ」は古より關東固有の方言であつた。明治以後「ろ」は方言ではなくなつたが歴史の上から嚴肅な語ではない。それ故、「御賛成あらせられる」などといふ様なものが下一段活であつても「ろ」を附けては調和しない。そういう嚴肅な語では「よ」を用ゐるより外はない。平易な語でも嚴肅に用ゐる場合には「ろ」ではいけない。例へば教科書の練習問題などに「次の文を解釋して見ろ」などはかけない。

「ろ」「よ」の語源

「ろ」「よ」の語源 「ろ」と同源と思はれるものが澤山有る。

1 名詞的になつたもの、「此れ」の「れ」、「我等」などの「等」、「子ら」「子ろ」「妹ろ」などの「ら」「ろ」、「我が大君ろかも」などの「ろ」。

2 語幹となつたもの、「清ら」「青ら」などの「ら」「せららく」と「ろく」などの「ら」「ろ」。

3 「散るらむ」「咲くらし」などの「ら」。

4 口語「やら」、文語「やらん」の「ら」。

5 語尾化しようとしたもの、「畏きろかも」「妻子のなみをは思はすろ」などの「ろ」。命令の

「ろ」はこのなかま。

語尾になつたもの、ラ行動詞の語尾、二段活系の「る」「れ」。

その根原は、然ある状態を表すものであつたらうと思ふ。

「よ」は感動の助辭であつたらう。今日の人は「燃えよ」「治めよ」などを命令と思ふが始めは「燃え」「治め」が命令であつて「よ」は感動であつたらう。文獻に徴しても下二段やカ行變格は「よ」なしに命令に使はれてゐる。

方言の命令

一二段活の命令の方言 越後の人は一二段活系の活用の第五活段を命令に使つて「早く起きれ」「試験を受けれ」「こゝへ來れ」などの如くいふ。「起きろ」「受けろ」「來い」の意である。これから考へると「ろ」を直ちに「れ」の變化した語尾と見て東京語の「起きる」は「起き、起き、起きる、起きれ、起きろ」と活用すると考へることが出來さうに見える。しかしそれは早計である。何となれば「爲」の命令は「しろ」である。「しろ」ではない。萬葉に「せろ」あぞせろとかも）が有るが「しろ」はない。「ろ」と「れ」を直ちに同性質と見ることは出來ない。

「な」の用法

「な」の用法 禁止

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第三節 感動助辭

三二三

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第三節 感動助辭

三二三

禁止

「な」は禁止を表す助辭であつて、動作動詞の第三活段へも第四活段へも附き得るものである。第三活段へ附けば「朝寝すな」「こゝへ來な」の如く直截終止格の禁止態となり、第四活段へ附けば「朝寝するな」「こゝへ來るな」の如く再指終止格の禁止態となる。

文語では「な」を第三活段へ附け東京語では第四活段へ附ける。近畿以西の語では地方に因つて第三活段第四活段兩方へ附け或はその一方へ附ける。

「な」の下へ感動の「よ」が附いた「なよ」は音便で「ない」となることが有る。「馬鹿を言ふない」「ぶざけるない」など。

「ぞ」「ぜ」

「ぞ」「ぜ」の用法

指示辭告

「ぞ」は動詞の第四活段へ附いて指示辭告の意を表すものである。

一寸掻を出すチヨツカイと手を焼くぞ。

あんな驛で夜下りると宿屋が無いぞ。

對手の知らないことを教へ告げるのである。しかし他人に教へ告げるばかりでなく、自分が自分に教へ告げる形式を以て自分がそのことに氣が附いたことをいふ場合が有る。

おや變な處へ出たぞ。路が違つたかな。いけないぞ、これは。おや雨が降りさうだぞ。
 「ぞ」は代名詞の「共」から轉じたものである。それ故指示の意が有る。指示の意が有るから
 第四活段指定形を受け、指定形で敘述の結果を一實質として再指したものを「ぞ」で三指す
 るのである。

「ぞ」の下へ更に感動助辭の「よ」が附くと「ぞよ」となる。「よ」は告示の助辭である。「ぞ」の誨
 告を更に「よ」で告示する。「ぞよ」が通音で「ぞえ」となる。その「ぞえ」が短縮すると「せ」とな
 る。「せ」は

あんな驛で夜下りると宿屋が無いせ。

「無いせ」は「無いぞ」へ告示の意が加つてゐる。

「て」の用法

「て」は動作詞形容詞の第四活段へ附いてその敘述の結果を指示し、そうあることに對する
 自己の感服を他人に告示する語である。

彼奴はどうもしやうが無い奴だて。

諸國諸大名は刀で殺す絲屋娘は目で殺す、どうも此の結句が巧いて。

「て」は「とえ」(とよ)の約音である。「と」は「とある」の意、「え」(よ)は告示の意の感動助辭で
 ある。

「は」の用法

「は」は發音は「わ」である。動詞の第四活段へ附いて自己の感想をいふ語である。これに二
 種の用法が有る。

一、單に自己の感想を述べる。

何、胃潰瘍で酒を飲んでゐるつて。馬鹿な奴だなあ、それであ直りあしないは。死
 んでしまふは。(死んでしまはあ)

そう此方の思ふやうには行きませんは。向うだつて心得て居まさあね。(居ますはね)
 第四活段の語尾がウ列である場合は語尾と「は」とが合してア列の長音になることが多い。

しまふは——しまはあ 居ますは——居まさあ

有るは——有らあ 見るは——見らあ

語尾がア列の場合も同様である。

有つたは——あつたあ

そうだは——そうだあ

第四活段がイ列の場合は「は」が「や」になることが有る。

此方は丸で知らないはね——知らないやね

それはあんまりひどいは——ひどいや

「は」の下に「よ」があり「よ」が音便で「い」となると「はい」となる。これは近畿地方の語に多いが東京でも稀には使ふ。

「はい」どうも困りますはい。 知らないはい、(東京ヤ、近畿ヨ)

「はい」を漢字で「哩」とかく位で京都地方では昔から盛に行はれてゐる。

二、婦人語である。「は」が特に抑へた様に重く發音せられ、自己の感想を人の感情に訴へる。

今日は本たうに面白うございましたは。

そんなことは無いは。

「はよ」

三、婦人語に、明治の末あたりから「は」の下へ「よ」を附けて「はよ」といふ習慣が出来出し

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第三節 感動助辭

三二七

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第三節 感動助辭

三二八

た。始めは花柳界から起つたものであらと思ふ。大正以後は一般に用ゐられるやうになり小學女生あたりまで盛に用ゐる。これも「は」が重くゆつくり發音される場合は感想を他人の感情に訴へる優美な語であるが、「は」が速く無難作に發音される様になつて感情を他人の感情に訴へる意味は非常に稀薄になり、「よ」の意味が強く爲つて否な語になつた。「有るは」は優美な語であつてこれでは喧嘩は出来ないが、「有るはよ」ならば立派に喧嘩が出来る。婦人語として「はよ」は用ゐないやうに教育者の努力を煩はしたい。

以上(二三三)何れに拘らず「は」を「わ」と書く人が有るが、それは語源を知らないからで、甚しきは片假名で「ワ」と書く人が有る。語源を知らないことを立派に證明してゐる。

「は」はもと題目を提示する助辭である。「この花は何といふ綺麗な花だらう」などの「は」である。「この花は」だけ言つて下を言はない時は古文では「は」が感動を表す。古へは多く下へ「や」「も」を附けて「はや」「はも」と云つたが「は」だけ用ゐることも有つた。

君が住む宿の梢の行く／＼も隠る／＼までに願みしはや。 大鏡時平

近き皇胤をたづねば融等も侍るは。 大鏡基經

貴方のお住ひの木が見えなくなるまで振り回り／＼したはい。 口語

「は」の語源

近い皇胤を尋ねたら此の私だつてそうだよ。口語

と解して見れば「は」が口語のと等しいことが分る。この「は」を「わ」と書くことは國語調査會流でもない筈である。

「き」の用法

「さ」の用法

「さ」は決定性の顯著なことを表すものである。故に勿論といふ意を帯びる。

1 いくら獨逸だつて世界を相手にしては敵はないさ。

2 君が悪いんだよ。いくら大人しい人だつてしまひには怒るさ。

3 判人官だつて官吏は官吏さ。

(1)の様に動詞の第四活段(指定形)へも、(2)の様に敘述性を帯びた名詞へも附く。その接續は「か」と同様であつて名詞、動詞に拘らず敘述性の有る體言へ附くのである。「僕がさ」「此れをさ」「直ぐさ」「又さ」「知らないさ」などの様に敘述性を持ち且つ體言化してゐるものへは何詞何語へも皆附く。

「さ」は體言化された「……」と「の下へ附いた時には決定性の顯著といふ程重くなく用ゐられ

「ぞ」の語源

る場合がある。

君、あの人はそんなことは全く知らないさ。

文語の「知らずとぞ」位な意である。

「ぞ」の語源は「ぞは」である。「ぞは」の約音である。

誰により思ひ亂るゝ心ぞは。知らぬは人のつらきなりけり。古今六帖
こういふ「ぞは」である。「其れは一體誰の爲に思ひ亂れる心なのさ」の意である。「ぞは」の「ぞ」は今濁音に讀むが、古くは清音であつた。「さ」が清音であることは口語では文語よりも久しく維持されたものと見える。

「や」「さ」

告示

「や」「さ」の用法

「よ」は告示の助辭である。對手の知らないことを此方が告示するのである。

貴方は知らないでせうが彼の人はいく人ですよ。

私は本とうに怠け者よ。試験前でもちつとも勉強しないのよ。

おい／＼考へて物を言へよ。乃公の傘にお印が有らあ。

よく見ろ、これが君の傘かよ。

「よ」は一切の、敘述性の有る語へ附く。殊に他の感動助辭よりは用法が廣く、「言へよ」起きろよ」「言ふなよ」の如く命令の語の下へも、「君の傘かよ」の如く疑問の語の下へも。「頼むぞよ」などの如く狹義の感動の語の下へも附く。

「よ」は音便で「い」となると告示の意が輕くなる。

「誰だい。」「乃公だい。」「そうかい。」「分つたかい。」「分つたい。」

これらの「い」は皆「よ」の意の輕いものである。

「い」は「え」ともなる。古い口語では「い」でなく常に「え」を用ゐたが、東京語では疑問の語の下へだけ使ふ。

誰だえ。

分つたかえ。

善いかえ。

まだかえ。

母親が子供にいふやうな場合に用ゐるので、「い」よりは親愛の趣がある。

「や」の用法

「や」の用法 呼掛

呼掛

「や」は名詞の下へ用ゐて呼掛に使ふ。親愛の語である。

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第三節 感動助辭

三三二

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第三節 感動助辭

三三二

太郎や。

花子や。

赤ちやんや。

兄さんや。

「爺や」「婆や」「坊や」などは、もと名詞へこの「や」が附いた呼掛の語であつたのが轉じて單なる名詞となつたのであるから、今日では呼掛には更に「や」を附けて「老僕や」「乳母や」「坊やや」といふ。子守や幼婢を「姐や」といふのはもと方言であつたのが明治末より東京に流入したものである。

親愛の呼掛の「や」は小弱者に對するものであるから、人を一人前に對手にする場合には用ゐない。

演説などで呼掛に「よ」を用ゐて「諸君よ」などいふのは、文語味を帯びたものであつて純粹な口語ではない。

子供が母を呼ぶのに「母さんよう」などいふことが有るが、この「よう」は形式感動詞である。「母さん」と「よう」は多少離れてゐる。「太郎や」の「や」などの名詞に對する關係と違ふ。

古風な女中などが「旦那様え」「奥様え」など呼ぶ「え」は「よ」の通音である。「や」「も」「よ」の通音であるが、「え」は「や」と違ひ敬語であつて親愛の語ではない。

「よ」

「え」

第四節 提示助辭

總說

提示助辭を説くには連體、連用といふことを説かなければならない。

私の友だち。

其の家。

金のなる木。

目の遠い人。

日本の春。
或る日。

の「――」は下の「。」。(多くは名詞)の、意義其の物——意義の實體——へ從屬する。故にこ

の「――」の用法を連體といふ。連體とは意義の體へ連る意である。意義の體とは意義の實體意義その物をいふのである。體を名詞と解するのは俗解である。

1月が出た

山が高い

2花を折る

舟に乗る

3運動する

御助け下さる

4今日行く

一日遊ぶ

第六章 靜助辭(附、頭助辭)

第四節 提示助辭

三三三

第六章 靜助辭(附、頭助辭)

第四節 提示助辭

三三三

遊んで暮す

春が来れば花が咲く

速く走る

靜に眠る

すぐ歸る

大變面白い

右の「――」は下の「――」の語(多くは動詞)の意義の運用へ從屬する。故に「――」の様な用法を連用といふ。連用とは意義の運用へ連るといふことである。意義の運用とは意義その物でなく、意義の表はし方、意義の取扱方をいふ。用を動詞の意と思ふのは俗解である。連用の語には色々有る。右の例の(1)は主語、(2)は客語、(3)は實質語(補語)、(4)以下は修用語で皆連用語である。品詞から言へば名詞、動詞、副詞の三種である。

連體、連用の解釋が難しいならば、姑く俗解に従つて體を名詞と思ひ、用を動詞と思ひ、名詞の上へ連れば連體であり、動詞の上へ連れば連用であると思へば、一時それでも善い。それで差支が有つた場合に漸次正當の解釋を求めれば善い。

提示の助辭は専ら連用の語へ附いてその意義を提示するものである。連體の語へは附かない。終止の語へも附かない。

〔連用語〕

〔提示助辭〕

〔連用語を承ける體〕

月(が)……	は	出る(出ない)
花(を)……	ほしか	折る(折らない)
運動……	こそ	する(しない)
今日……	ばかり	行く(行かない)
話して……	ぐらゐ	見る(見ない)
速く……	なり	走る(走らない)
すぐ……	すら	歸る(歸らない)
	なんぞ	

右の上段の七行は皆連用語であつて「月が出る」「花を折る」といふ様に各その下段の語へ續く。中段の十五行の語は皆提示助辭である。各別々に上段の七行の各へ附くから七行は皆「月が出る」「月も出る」「月しか出ない」……「花は折る」「花も折る」「花しか折らない」……運動……といふ様に續く。

提示助辭が主體の語へ附く場合は主格の「が」を用ゐない。例へば「月が出る」「月も出る」「月しか」「月こそ」と云つて「月が出る」「月がも」……と言はない。それは「が」はもと連體の助辭であるのを口語では特に主格に用ゐるのであるから、「が」と提示助辭とは調和しない

のである。

他動の客體の語の下に提示助辭のある場合も、東京語では「を」を用ゐない。例へば「花をば折らない」と言はない。「花は折らない」といふ。文語及び或る地方の方言では「を」を使ふ。そうして「を」の下に「ば」が有る時は「は」が「ば」と發音される。

提示助辭の中には提示助辭としてでない用法の有るものも有る。

提示助辭を分けて題目の助辭、特提の助辭の二種とする。「は」「も」の二つは題目の助辭で他は皆特提の助辭である。

題目の助辭

題目の助辭

「は」「も」

「は」「も」の一般の用法

題目の助辭には「は」と「も」の二つが有る。

「は」と「も」の區別をいふと、「は」は事情の異なる二つを此と彼とに分けていひ、「も」は事情の類似してゐる二つを合せていふ。例へば

「父は役人でしたが、私は商人です。」

合説

外では柔順しくて内では我儘だ。
父も役人でしたが私も役人です。

外でも柔順しく内でも柔順しい。

のは父と私とを分け、内と外とを分けていふ。之を分説といふ。のは父と私とを合せ、内と外とを合せていふ。これを合説といふ。

分説合説は「は」と「も」との別であつてそれだけでは「は」もの性質の根本には觸れて居ない。「は」ものに共通な性質が無ければならない。其れが即ち題目の提示である。

吾々が或る敘述を爲すには二つのしかたが有る。

一はその敘述の範圍を豫定して之を題目となし、題目を掲げて置いて、その題目に就いて判斷を下すしかたである。之を題示的敘述といふ。右ののは何れもそうだ。即ち題目は多くは「は」を用ゐるが、他の題目と同様な解説を豫想する場合には「も」を用ゐる。

二は敘述の範圍を豫示せずに即ち題目なしに敘述する。之を無題的敘述といふ。

父が商人ですから私も商人になつた。

外で柔順しいから内でも柔順しからう。

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第四節 提示助辭

三三七

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第四節 提示助辭

三三八

の「」は無題である。「父が」外では下の「」に對して題目を成してゐない。之を平説といふ。「父が」は單に「」の主體を表し「外で」は單に「」の場所を表すだけである。平説には「は」もを附けない。

「は」も「も」無いのは凡て平説かといふとそうではない。

そんな人、私、一向知りません。

東京へ、貴方、いつ立ちますか。

の「△△△」。は題目であつて平説ではない。こゝにいふ題目を單説の題目といふ。

題目には分説合説單説の三種が有る。分ける意味も合せる意味もない題目は單説である。

單説と平説とは形の上では區別の附かない場合が多いが、區別の附く場合もある。其れは「が」と「を」である。平説で「が」「を」を用ゐる場合には分説や合説ならば「が」「を」を除いて「は」「も」を附ける。「が」「を」を除かずに「は」「も」を附けることは東京語にはない。然らば單説ではどうか。「が」「を」を除いたまゝで「は」「も」を附けない。

私が幹事です。

平説

私は幹事です。

分説

私も幹事です。

私、幹事です。

御飯を食へるか。

御飯は食へますが。

御飯も食へますが。

御飯、食へますか。

合説 題目

單説

平説

分説

合説 題目

單説

しかし「が」を無くして平説な場合もあるから一概には言へない。

題目語と平説語との別は、吾々が判断を立てる場合に於ける思惟の範疇である。此の區別は文法上論理上非常に大切なものである。單に語形上の區別とのみ考へてはならない。

凡そ吾々が判断を立てるに於てその中に働く概念には、既定不可變で選擇不自由なものと、未定可變で選擇自由なものとのある。題目は前者であつて解説は後者である。ざつと問題と答案と見れば善い。試験に於て問題は既定、不可變、不自由なものである。問題が氣に入らないからと云つて受験者が問題を改めることは出来ない。然るに答案は受験者がこれから書くのであつてどう書いても自由である。この問題と答案の關係を自問自答の形に改めれ

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第四節 提示助辭

三二九

既定不可變
の概念
未定可變の
概念

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第四節 提示助辭

三三〇

は題目と解説とになる。

題目語は既定不可變不自由であつて解説の圏外に在る。然るに平説語は解説の一材料(一部分)である。故に未定可變自由である。二者の間には侵すべからざる區別が有る。

題目語

私は 本會の理事です。

既定、不可變、不自由

この命題の目的は「私」といふものに就いて或る判断を下すのである。「私」といふ概念は最初から決まつてゐるので改めることは出来ない。これを改めては別の談になつてしまふ。

平説語

私が 本會の理事です。

未定、可變、自由

と云つた場合は「私が」が平説であるから「私が」も解説の一部である。従つて「私」といふ概念は既定不可變ではない。解説者が自由に決めるのである。此の命題に在つては「私が本會の理事です」の全體が解説である。題目を擧げない解説である。題目たるべきものは直觀のまゝで概念に上つてゐない。その概念に上つた場合は次の様な場合である。

題目語

解説語

本會の理事は 私が専務理事で某君が常務理事です。

これを見ても「私が」は解説の一部であることが分る。そこで

「私は理事です」

遠ふ

「私が理事です」

頗る近い

「理事は私です」

別
「は」が「の」

「私」が「の」では既定不可變で「は」では未定可變であるから「の」と「は」とは違ふ。又「は」は「私」が既定で「の」は理事が既定であるから違ふ。然るに「の」と「は」は近い。何となれば「の」は全部が解説であつて既定な概念が無い。既定な概念は直觀のまゝであつて斷句の外に在る。もし之を概念に上せれば「(理事は)私が理事です」となる。これが「の」と近いのは當然だ。近いと云つても等しいと言はないのは、一方は既定觀念が語の外に在るのに一方は語の中に在るからである。「私は」と「私が」とは間違へないやうに特に注意しなければならない。例へば自分が就職口を運動して某社長に面會することゝなつたとする。自分の姓名履歴は、社長は知つてゐるが受附は知らない。自分がその面會の約束の日に會社へ行つて受附に向つて

私は吉田と申します。社長に御取次を願ひます。

これは「私は」である。受附は何も知らない。受附の頭には吉田といふ觀念は無い。唯、現在新來の客の面を見たゞけである。受附と自分とに共通な觀念は「私」(受附から謂へば「あ

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第四節 提示助辭

三〇一

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第四節 提示助辭

三〇二

なた」である。「吉田」ではない。「私」がその對話に於ける既定概念である。さて愈面會が許可され案内されて社長に對面する。社長に「貴方が吉田君ですか」と問はれた。そこで

私が先日履歴書を差上げました吉田でございます。

といふ。「」は始めて社長の目に映じたもので「」は前から社長の頭に在る觀念である。「私」の方を既定概念として取扱ふべきではない。社長の方でも

私が社長の遠藤です。

と挨拶する。客が社長と初對面であるから「私」は既定ではない。「社長遠藤」といふ觀念は客の頭に前から有ればこそ面會を求めたのである。

客のいふ「私」も社長のいふ「私」も、何れも既定とはされない。單に「私」を既定としないのみならず、對手の頭に前から在つた「履歴書を出した吉田」「社長遠藤」の方を既定概念として題目語にして

先日履歴書をさし上げました吉田は私でございます。

社長の遠藤は私です。

と云つても善い。

しかし場合は種々である。社員の紹介なしに社長に面會した場合などは

私は先日履歴書を差上げました吉田でございます。

と云はなければならぬ。何となれば社長から話のない限り履歴書云々はまだ二人に共通な觀念ではないから既定概念にはならない。

又他に面會者の有る場合などもそうである。それは二人以上の面會者中から一人を抜き出していふのであるから、その區別の上で一方は何の用事、他方は何の用事といふ様に比較の上から既定概念になる。そんな様な特殊の場合が澤山ある。

初對面の時自ら姓名を名づける場合に、自分の名が問題になつてゐる時は自分の姓名を題目にして「吉田は私です」といひ、或は「私が吉田です」と云つて善いが、自分の名が全然問題になつて居ない場合に「私が吉田です」などといふのはよくない。何となれば「私が」といふと、その人の名が何等かの問題となつて居ない以上は、天下に有名な人でもある様に聞える。吉田といへば對者の耳に初耳ではあるまいと思つたものと見なければならぬ。これは傲慢か語を知らないかの何れかである。傲慢ならば人格の問題であるが言語を知らないのならば文法に注意する必要がある。

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第四節 提示助辭

四三三

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第四節 提示助辭

四三三

「は」「も」の接續

「は」「も」の接續 「は」「も」は連用語へ附くものであるが、連用語の中には意義の性質上「は」「も」と相容れないものがある。

「は」「も」の下

拘束格の「……ば」は語源が「は」であるから既に分説である。それへ「は」「も」を附けることはない。「花が咲けば」「花が咲けばは」「花が咲けばも」とすることはない。

「と」の下

拘束格の「……と」は分説ではないから之を分説にするには「は」を附ける。「雨が降ると」「は」を附けて「雨が降るとは」は欠席するなどいふ。拘束格は合説とは相容れないから「も」は附かない。故に「とも」「は」と「とも」とではなく一つの助辭である。合説的放任格である。拘束格の合説態ではない。

「とも」の下

放任格の「……とも」「は」既に「も」が有つて合説になつてゐるから「も」は附かないが、「……つて」「例、雨が降つたつて」は下へ「も」を附けて合説にすることが有る。

副詞の下

副詞の中には「は」「又」「も」の附きにくいものが多い。例へば「頗る」「略」「あまり」「寧ろ」などの類多くそうである。これらは意義の性質上題目とするに適しないのである。

「は」の音便

「は」の音便 「は」は正確な發音は「わ」であるが疎略な語では音の融合上種々に變る。其の原則は下の如くである。

一、一二段活系の活用の第二活段は下の「は」が「や」となることが有る。「見やしない」「受けやしない」「來やしない」。下が必ず「しない」「せん」の如く「する」の否定態になる。

二、二音長以上の語で下音が撥音、長音、母音(例、「そんな」「こう」「かい」)でないものゝ下では「は」は「あ」になる。例へば、花は——はなあ、月は——つきあ、——靴は——くつあ、店は——みせあ、音は——おとあ

助辭の下でも同様だ。「月には」——つきにあ、そうとは——そうとあ

「は」の特殊の用法

「は」は分説的題目を表す助辭である。その一般的な用法は既に説いたが、その分説的意義・題目的意義に種々特殊な運用が有る。やはり分説であり題目態であつても其れが如何に働いて居るか一寸誤解され易いやうなのがある。今例を擧げてさういふ様な用法を説明しようと思ふのである。

「毎」の意味
「は」

君は人の顔を視てはにや／＼笑ふが何がそんなに嬉しいんだい。

君の様にそう越しては移るんでは引越料が耐るまい。

彼奴は飲むとは喧嘩だ。

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第四節 提示助辭

三四五

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第四節 提示助辭

三四六

の「は」は「は」の動作の起る場合を表すのだが、「は」が有るから「は」は題目であつて且つ分説である。そこで「は」は一般性を帯びる。固より面を見た時笑ふ意は有るが「は」が有れば「面を見た時は笑ふ」の意である。「猫は獸だ」と言へばその「猫」は或る一つの猫でなく「凡べての猫」の意であるのと同じく「見た時は笑ふ」と言つたその「見た時」が「凡べての見た時」を指すことになるから「見た時」が一般性を帯びる。即ち度々人の面を見、見る毎に笑ふの意になる。「屢々越し、越す毎に移る」「屢々飲み、飲む毎に喧嘩をする」意になる。これは「は」の抽象性・一般性の利用である。

判斷の結果
を提示する
「は」

「貴方は何方ですか。」「尾州です。」「尾州は何方ですか。」「尾州は名古屋在です。」

北海道は石狩の國に於て生捕りました大熊でございます。

「彼の方は醫學士です。」「醫學士は何處の醫學士ですか。」
この「は」を「の」の意味と思つてはいけない。「は」と「の」とは非常に違ふ。甲の語中の「尾州」は單なる名詞としての「尾州」ではない。乙が「尾州です」と云つたその判斷作用の結果を表すとしての「尾州」である。だから「尾州は」は「尾州であることは」の意である。「その尾州たらくは」の意である。即ち

貴方の故郷が尾州であることは

（その指點が）何方です。

尾 州 は

判断の結果の提示

判断の結果の再判断

（これは）

生捕つた場所が北海道であることは

石狩の國で生捕つた 大熊です。

北 海 道 は

の如く解釋すべきものである。私の故郷は尾州です」といふ様なのは單純な判断である。その「尾州である」といふ判断に就いてその尾州中の如何なる點に於て妥當であるかを再び判断するのは判断の再判断である。

養父でも親は親だ。

忘れたけれども一度習つたことは習つた。

判断價值を提示する「は」

上手は上手だがまだ素人はなれない。

やはり判断の再判断であるが。これは判断の正否を判断するのである。「養父が親であるといふその判断は形式上正しい」といふ意である。「親であることは親である通りだ」の意である。その判断價值が形式上にだけ正しい時は「上手は上手だ」の如く「は」を用ゐるが、形式的にも實質的に兩つながら正しい時は「上手も此の上手ない上手だ」の如く「も」を用ゐる。

「も」の特殊用法

「も」の特殊の用法

「も」の意義は題目を合説的に提示するに在る。

合説の運用は之を分つて對比、總括、例示の三つとする。この三つに共通な意義は「も」の一般的意義であつてそれは已に前に述べてある。

一 對比的用法 對比は二つを相對せしめて比較するのであるがそれに種々ある。「今日も休みだ明日も休みだ」といふ様な對等な對比ならば「も」の一般的意義から直ぐ分るが、關係が複雑になると中々分りにくいがある、今その一斑を擧げる。

早くも風を食つて逃げてしまつた。

つら憎くもこういふことを吐すんだよ。

彼は哀にも犬死をした。

畏多くも御下賜品を賜はつた。

この「も」が何の意味か一寸分りにくい。これは「——と——」との對比であるが對等な對比ではない。最初の例でいふと、風を食つて逃げたといふ意義を基礎にして其れへ「早く」の意義を附け加へるのである。

條件を附加する「も」

對比

不明確な他
物との對比

彼は風を食つて逃げた。而もおまけに早くだよ。逃げただけなら驚くにも當らないが早くといふ條件も加つてゐる。

の意で、「且加之」の意が有る。「」を認めるのみならず「」をも認める意である。

右は條件の附加である。條件と事柄とを對比するのである。

今度といふ今度は乃公もどうも困つたよ。

君もいくちは無いなあ。

彼の男も中々遣手だ。

日本人にも悪い奴が居るよ。

これも對比であるが、對比の相手が漠然として不明確である。右の第一例で言へば、困るべき人が誰とはなしに外にも有りさうな様な氣分の中に乃公の困つたことをいふのである。若し他人はどうか知らないがといふ風に考へれば「乃公は」といふ。

よく出来てらあ、亭主も亭主なら女房も女房だ。

君も君ぢやないか、しつかりしろよ。(事情も事情だらうが)

學生も學生だが學校當局の態度もよくない。

第六章 静助辭(附、頭助辭)

第四節 提示助辭

三九〇

重ねた同一
語の間に用
ゐる「も」

第六章 静助辭(附、頭助辭)

第四節 提示助辭

三九〇

この「も」も對比である。唯「も」の上下が同一語であるが、上は外延を主とし下は内包を主とする。(い)で言へば上の「亭主」は唯その人を指し下の亭主は「甚しい」の意である。(い)の下の「君」は「いくちがない」の意である。

資格も資格だが實力が第一だよ。

繆致も繆致だが素行を調べる必要が有る。

飯も飯だが先づ一杯遣らう。

やはり「」は内包を表すので「必要だ」「問題になる」「結構だ」などの意である。(資格は必要なものであるから「必要だ」といふ内包を有する。)

同一語を重ねても次の様なのは違ふ。

「御迷惑ですか。」あゝ迷惑も大迷惑だ。」

「彼奴は少し馬鹿の様だなあ。」あゝ馬鹿も底抜の大馬鹿野郎だ。

私の店は東京も銀座の真中です。

これは判断の價値の再判断である。(い)の「迷惑」は「迷惑であること」の意で「迷惑なり」と考へた判断の結果を表す。下の「大迷惑だ」は「迷惑」の判断價値を再判断して然りとすると同

判断價値の
提示

時に更にその甚しいことを述べる。迷惑と大迷惑とが兩方肯定されるから「も」を用ゐる。迷惑だけの形式的な肯定ならば「は」を用ゐて「迷惑は迷惑だが何構ひません」といふであらう。(四)の「東京」はその「東京なり」と考へた判断の結果を提示する。下の「——」は之を然りとすると同時に更にその繁華な意を述べる。「——と——」と兩方が肯定される。

飲みも飲んだものだなあ。三人で四升飲んだぜ。

此の建物は立派も立派だが金も掛つてゐる。

彼の男は働くも働くが使ふも使ふ。

この「も」も對比である。「——と——」との關係は判断價値の再判断である。「飲み」は「飲んだ」といふ判断の結果を提示し、下の「飲んだ」はその判断價値を再判断する。飲んだといふ判断も、飲んだといふ判断の通りである「……」の意である。

二 總括的用法 二つを比較して合一するのは對比であるが。數の有るだけを比較して全部を合一するのは總括である。

私は明日は何處へも行きません。

明日は内には誰も居りません。

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第四節 提示助辭

總括の「も」

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第四節 提示助辭

何と云つても世の中は不景氣だ。

この用法は疑問の語を總括の意にする。「何處へも行かない」は總括である。場所が甲乙丙の三つ有る時に「甲地へも乙地へも丙地へも行かない」と云ふのは枚舉である。枚舉ならば對比である。

もう幾らも残つて居ません。

私は東京へ來てまだ何年にもなりません。

欲しければ上げませう、幾らでも有ります。

これらは誇張された總括である。

疑問詞は「も」無しにも總括になり得る力を持つてゐる。例へば「何一つ出来ない」「誰れ知らない人は有りません」などいふことも有る。

三 例示的用法 全體の中の一部を言つて全體を代表させる用法が例示である。そうして例示はさまざま有る。

今日はそう寒くもない。

いくら急いだつて今月中にも形づきませう。

例示の「も」

彼の人は毎月本を二三百圓も買ひこむでせう。

三年も勉強したら少しは物になるでせう。

生きてゐれば元帥にもなれようといふ人だ。

まさか賄賂も取るまい。

心配で夜も寝られない。

これらの「も」は皆例示である。「寒く」と決めて言ふには「も」は使はない。自分が今氣候に附いて否定しようとするその否定の實質を「寒く」で代表させたのである。だから「寒くもない」は「寒く」だけの否定ではなく「暖く」「熱く」などの否定も含まれてゐる、勿論自然に、暖でない又大して寒いといふ程でもないの意が出て来る。「今月中にも」「三年も」は時期時間の例示である。「大將にも」は榮達（栄達）の例示、「賄賂も」は不正行為の例示である。「夜も」は神經昂奮の例示である。

例示が何故合説で表されるか。それは分説ならば分けられて範圍が確定する。合説ならば合せられて廣漠になる。ぼんやりと類似のものゝ存在を認めて其れへ明瞭に考へた或る物を加へる。 $X+N$ である。 X は不明ではあるが N に類似したものである。そこで N は全

體($X+N$)ではなく全體の例示である。普通の對比は「昨日も今日も寒い」といふ様に判つた物を合せるのである。 $N+P$ である。例示は、不明なものへ判つた物を合せるので $X+N$ である。

されば例示の「も」は意義を不明確にし、婉曲にする。

春やとき花やおそきと聞き分かむ鶯だにも鳴かすもあるかな。古今集（古今集）

などの「も」は從來の文法には軽く添へた「も」と説き、甚しきは感嘆の「も」と説いてゐる。それは「も」の用法がよく分つて居ないからである。何でもない、「鳴かすも」は聞き分ける手がゝりのないことの例示である。

一日も遊ばない。

夫婦喧嘩は犬も食はない。

この川には魚と云つたらめだかも居ない。

これらも例示であるが、甚しい一例を擧げて全體を證するのである。普通の合説は「亦」の意になるがこれは「雖」の意になる。(雖一日不敢嬉遊、雖犬不與齒)

特提の助辭

提示助辭の中、「は」「も」の二つを題目の助辭とし他を皆特提の助辭とする。判斷に題目を立てることは人間の思想構成に於て極めて一般的な範疇であるが、その他の提示は稍特殊であるから「は」「も」以外を皆特提とするのである。

特提の助辭には「しか」「ほか」「こそ」「ばかり」「だけ」「まで」「くらゐ」「でも」「なり」「なり」と「なりとも」「さへ」「すら」「など」「なぞ」「なんか」等が有る

「しか」「ほか」

「しか」「ほか」

まだ一度しか行かない。(一度ほか)

外國へといへばまだ上海へしか行かない。(上海へほか)

そうとしか考えられない。(そうとほか)

彼處には百姓屋しか無いから宿に困る。(百姓屋ほか)

「しか」「ほか」は其れ以外を指すのである。一度だけ行つたのでその以外即ち二度以上は行かないのである。上海へだけ行つたので上海以外へは行かないのである。

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第四節 提示助辭

三五五

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第四節 提示助辭

三五六

「ほか」は「外」である。「しか」は「しき」は「約音であつて既に」はを含んでゐる。「しき」は「しきり」の意である。又「一度しか行かない」を「一度つきり行かない」といふやうに「しか」の代りに「きり」ともいふ。「きり」は「切り」で「しきり」は「爲切り」で同義だ。「しか」「ほか」「きり」を用ゐた場合はその下の語は必ず否定になる。即ち外を否定にして内を肯定にする意である。だから「しか」を「だけ」にかへて下を肯定に換へると「しか」を用ゐたのと同義になる。例、一度しか行かない——一度だけ行つた。

「一度しか」を「一度しきや」「一度つか」といふ様に「しか」は音便で「しきや」「つか」となることが有る。

「しか」の方

方言の中には「しか」の代りに「なんであ」といふ處(例、靜岡)「一度なんてあ行かん」「上海へなんてあ行かん」などいふ。「なんであ」は「ならでは」の意で「ならにては」の音便並に約音である。その「に」は古い否定の語。

「こそ」

「こそ」

いづえ私こそ失禮致しました。

そんなことになるかと思へばこそ色々心配してゐるんだ。

「こそ」はその物が他のものよりも特にそうある意を表すのである。「私こそ」は貴方よりも

私が殊に失禮であつたことをいふのである。「こそ」の語源は「此其」である。「私こそ」は「私」といふものが此れが、其れが」といふ様に同じものを再三指す意から出来たのである。

文語では「こそ」が有ると下の動詞は第五活段を終止格にするが、口語ではこの法は無くなつた。老人などの語には稀に

早く直さうと思へばこそ醫者へも遣れ。誰が道樂に藥代を拂ふものか。

などの様な云ひ方が残つてゐるが、それは古い口語の遺物であつて普通の語ではない。

「ばかり」「だけ」

外の人の前ではいばつてゐるが伯父にだけは頭が上らない。

外の部屋は後で善いから先に客間だけ形づけろ。

私にだけ何でこんなことを言ふのだらう。

彼の人は毎日内にばかり居る。そうして本ばかり読んでゐる。

「だけ」は範圍を限定してその一部を單獨に扱ひ、事柄の關係する所がその一部以外に出ない意を表す。「ばかり」もそうであるが、其の上に、事柄が専ら其の物に關係する意を含む。されば

私にだけ話す。——他人に話さない。

私にばかり話す。——頻に(専ら、度々)私に話す。

麥酒だけ飲む。——他の酒を飲まない。

麥酒ばかり飲む。——頻に麥酒を飲む。

男の子だけ引き取る。——女の子は引き取らない。

男の子ばかり引き取る。——二三人引き取つたが男の子だけだ。

「ばかり」は「専ら」頻に「度々」澤山「甚しく」等の意を帯びる。

「だけ」は語源は名詞の「丈」(物の長さ)である。だから物の範圍を尺度一杯に切る意である。

「伯父だけ」は「伯父」を尺度として人間の範圍を限定するのである。

「ばかり」は「量り」である。「ばかり」は「何處をばかりとかは尋ねべき」などの「ばかり」で「あてど」「たより」「めやす」の意である。「伯父ばかり」は「伯父」を尺度とし目安として人間の範圍を量るのである。

「だけ」ばかり」は數詞へ附いて「百圓の中五十圓だけ使ふ」「五十圓ばかり使ふ」などの様に用ゐることが有る。その場合は提示助辭ではない。副助辭である。意味も違ふ。

「まで」

あれでは親友にまで見放される。

あの男はとう／＼運轉手とまで零落れた。

あんな教員は學生はおろか小使からまで見下げられる。

事柄程度の彼に止らずして延いて此に及ぶ意を表すのである。「親友にまで」は其の人を見放す人が一般人に止らずして親友に及ぶ意である。

「東京まで歸る」などの「まで」(副助辭)とは語源は同じでも用法が違ふ。提示の「まで」は必ず連用語へ付き意味は程度の甚しいことを表すに在る。

「まで」の語源

「まで」の語源は、「未^ミ」「貧^ヒ」「早^{ハヤ}」「惑^{マダマ}」などと同じで不十分の意が元である。不十分なものとは十分になることを豫想するから到達の意となり、更に程度の此に及ぶ意となつたのである。

「ぐらゐ」

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第四節 提示助辭

三五九

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第四節 提示助辭

四〇〇

一人息子だ、大學へぐらゐ入れるんだなあ。

あの男なら將來勅任官にぐらゐなるだらう。

男でないか、酒ぐらゐ飲むさ。

その事物を輕いものとして取り扱ふ語である。「大學へぐらゐ」は大學へ入れることは過ぎたことでない意である。勅任官にぐらゐ」は彼の才能としては過大の想像でない意である。「ぐらゐ」はもと名詞の「位」である。事の程度を表すのである。「三年位たつたらば」「十日位過ぎてから」「彼の人ぐらゐには負けない」などの「ぐらゐ」は提示の「ぐらゐ」ではない。副助辭、名助辭である。提示ならば必ず連用語へ附く。

「じゃ」

「じゃ」

姑息の例示

今日は此れといふ用事も無いから小説でも讀まう。

東京に居ても始まらない。滿洲へでも行かうか。

久しく便りがないが煩つてでも居はしないか。

「でも」は確定が出来ないことを姑く假に例示する語である。小説を讀まうとは決定して居ないが適當な事柄として假に小説を挙げたのである。外に適當な事が有れば其れでも善い

「なり」「な
り」と「なり
とも」

「なり」「なりと」「なりとも」

閑さへあれば温泉へなり
海水浴へなり行くんだがなあ。

自動車は速くなり
遅くなり自由
に走れる。

東京へなりと、大阪へなりと、何處へなりとも好きな處へ行くが善いや、家に居て貰つても役には立たないから。

「なり」なりと「なりとも」は皆其の事柄(右の例では「行く」)に關して適當なものを例示する。「なりと」は選擇の自由な意味が有り、「なりとも」は選擇の自由な意味が更に強い。選擇の自由は多くは他人の云爲に對して此方が呆れて放任する場合である。

「なり」はもと斷定の動助辭「なり」の不十分終止格、「なり」と「なりとも」はその放任格であるがそれを提示の助辭として使ふのである。

「あゝ」

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第四節 提示助辭

三六二

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第四節 提示助靜

1 家康には秀吉でさへ負けた。

息子にさへ遠慮する。

2月さへあれば夜道は平氣だ。

死にさへすれば責任は免れる。

(1)は甚しいものを擧げて一般を證する意である。秀吉を以て凡庸人に勝目のないことを證する。(2)は唯其れ一つ必要な意である。

「さへ」の語源は「其方^{ソコ}」である。「其方^{ソコ}」で前言を指示して意味を強めるのである。文語では「さへ」を、其れへ更に加へる意に使つた。

「すら」

秀吉ですら家康には負けた。

父親にすら反抗する。

「すら」は「さへ」の第一義と同様である。語源は「其等」^{ソラ}である。

「など」「なぞ」「なんぞ」「なんか」

活動へなどつひ行つたことがない。(活動へなぞ、活動へなんぞ、活動へなんか)

私決して怠けてなんか居りません。(怠けてなんぞ)

「など」「な
ぞ」「なん
ぞ」「なん
か」

「など」は「何孰」^{ナニニク}、「なぞ」は「何其」^{ナニニク}の略音で、「なんぞ」は「何其」^{ナニニク}の音便である。「なんか」は

例示であるから物を疎外する意が有る。右の例では「活動へ」や「忘れて」を疎外してゐる。

「か」「やら」

「か」は感動助辭中の疑問の助辭であるが、之を特提の助辭として用ゐることが有る。又名助辭として用ゐることも有る。

1 此處は何處ですか。

疑問の助辭

2 何處へか行つた。

特提の助辭

3 何處かへ出つた。

名助辭

(1)は「か」で意味が切れる。終止格の疑問態である。(2)は連用語「何處へ」を提示して不定の意にする。(3)は疑問名詞「何處」の無格なものへ附いて不定名詞を作る。その不定名詞はやはり無格であつてその下へ「へ」が附いて始めて客格になる。(2)の様に「何處へ」といふ客格になつてゐるものへ「か」が附くのと意味のぐはひが違ふ。

「やら」「も」「か」と同様に三通りに使ひ得る。

提示以外の用法

提示以外の用法

特提の助辭の中、單に提示助辭としてのみ用ゐられるものは「しか」「ほか」「こそ」「でも」の

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第四節 提示助辭

三六四

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第五節 名助辭

三六五

四つであつてその餘のものは皆提示助辭としてゐない用法が有る。そうしてそれは多く名助辭としてゐる。第三六七頁に詳説する。

第五節 名助辭

本來の名助辭

名助辭は名詞の如く事物を表す意義の有る助辭である。もとより助辭であるから單獨には使へない。必ず他語を戴き他語と共に一名詞を成すのである。例へば「私ども」「弟ども」の「ども」の類である。「ども」だけでは一名詞を成さないが、「私ども」「弟ども」は何れも一名詞である。そうしてその名詞の内部の主要な部分は「私」「弟」ではなくて「ども」である。「私ども」「弟ども」も「皆」「ども」の一種である。

名助辭の重なるものは次の如くである。

さん	校長さん	和尚さん	さま	旦那さま	奥さま
ら	此れ等	其れ等	たち	親たち	人たち
ども	私ども	人足ども	がた	華族がた	殿がた

「さん」「さま」は尊稱に用ゐる。直接にその人を表示することはその威尊を瀆冒するやうな感じが有るから、その人の様子を指してその人を間接に表示するのである。

「さま」の一用法として「御せは様」「御氣の毒様」「御手数様」「御都合様」などの様に使ふことが有る。これらは「……様」を名詞として「御せは様をかける」「御都合様に由つては」などの如く用ゐることもあれば、「……様」を無活用形容詞として「御世話様なことだ」「御氣の毒様な人」などの様に用ゐることもある。前者の「様」は名助辭で後者の「様」は無活用動助辭である。無活用動助辭の場合は下へ「○、に、○、○、○」(ニ活)、「だら、だり、だり、だ、だれ」(特サ變)、「でせ、でし、です、です、ですれ」(特サ變)を附けて活用を與へる。

「さん」は「さま」の音便である。「さま」の語源は「さ」と「ま」との結合であらう。「さ」は「遠さ」「長さ」「行くさ」「歸るさ」などの「さ」であり「ま」は「懲りすま」などの「ま」で、「多み」「深み」などの「み」の通音であらう。「さ」も「ま」も暗にその様子を言ふ語であつて二つが結合して「さま」となつたのであらう。

「ら」「たち」「ども」「がた」は複數又は例示の語である。そうして「ら」は平稱、「ども」は卑稱、「がた」は尊稱である。「たち」「は」本來は微弱な尊稱であつたが今では平稱にも用ゐる。

「さん」「さま」の語源

複數、例示

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第五節 名助辭

三六五

第六章 靜助辭(附、頭助辭) 第五節 名助辭

三六五

複數は相等しい個體が二つ以上ある意で、人が數人居るのを「人たち」といふ類である。例示は多數の事物の中の一を以て多數を代表させるのである。「私ども」などはそうだ。私といふものは一人であるが「私」以外の人をも代表する。私が數人居るのではない。

「等」は東京語では餘り使はない。百圓が其處らの金「幾ら」です。「此處方ら」「其處方ら」「彼處方ら」「何處方ら」(「方」は「方」の通音で發音は「い」など場所や數量の例示に用ゐる。

「我等」「彼等」など云ふのは卑俗の語である。「僕等」「君等」「此れ等」「其れ等」などいふのは文語の利用である。「お前ら」「私ら」「あの人ら」「子どもら」などいふのは方言である。

「等」はもと「清ら」「青ら」「侘しら」「行くらむ」「散るらし」などの「ら」と同源であつて類似した状態を指す語である。

「たち」は「友どち」「親子どち」などの「どち」「どち」と同源である、性質を「たち」といふのも「立ち」の意で同源であらう。つまり類似した性質のものを廣く指して「何々たち」といつたのであらう。

これらの名助辭は從來は多く一般的助辭と見ずに接尾語と見て居た。しかし尊稱や複數などは文法上の一般的形式であるから之を一般的助辭と見る方が善いと思ふ。

「ら」の語源

提示助辭にもなる名助辭

右の外提示助辭の中に、名助辭として用ゐられるものが澤山有る。今提示助辭に就いて他の用法の有るものと無いものとを分けると、次の表の如くなる。

提示	
題目は、も	しか、ほか、こそ、でも、なりと、なりとも
特提	だけ、ばかり、すら、さへ、まで、くらゐ、なり、か、やら、など、なぞ、なんぞ、なんか
	他の用法は無い。
	名助辭ともなる。

右の表の如く「だけ」「ばかり」……「やら」の九つは名助辭ともなる。その用法は

1 親友にだけ話す

親友に[△]だけ、ばかり、すら、さへ、[△]なり、か、やら、[△]話さない

2 親友だけに話す

親友[△]に[△]だけ、ばかり、すら、さへ、[△]なり、か、やら、[△]に話さない

右の(1)では「だけ」「ばかり」……「やら」が提示助辭であるが(2)に於ては名助辭である。(1)の

「親友に」は連用語であるから其れへ附けた「だけ」は提示助辭である。然るに(2)の「親友」は單なる名詞であつてまだ格はない。それへ「だけ」が附いてもやはりまだ無格である。「親友だけ」は無格の一名詞である。だから(2)の「だけ」は名助辭である。格を示す「に」は(1)では「だけ」より内に在り(2)では「だけ」より外に在る。

右の例は依據格(何々に)に就いての例であるが、

- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| 1 親友へ [△] だけ知らせる | 2 親友だけへ [△] 知らせる |
| 1 親友と [△] だけ相談する | 2 親友だけと [△] 相談する |
| 1 親友から [△] だけ聞いた | 2 親友だけから [△] 聞いた |

の如く「へ」と「から」などを用ゐても(1)(2)の二用法が有る。

「なぞ」「なんぞ」「なんか」は名助辭にはならない。これらは

芝居へ[△]なんか行かない 芝居[△]なんかへ行かない

の如く(1)の「なんか」は名助辭ではなく立派に名詞である。たゞ意義が形式的だから之を形式名詞といふ。

名助辭の中には文法上の一般的なものでなく特殊なものもある。たとへば「長さ」「深み」「十

人前「三年ぶりの」「さ」「み」「前」「ぶり」の様な類がそうだ。こういう特殊な名助辭は之を接尾辭といふ。

第六節 副助辭

副助辭は、副詞の如く他語を戴いてその戴いた他語と共に一副詞を構成する助辭である。例へば「歩きながら話す」の「ながら」などがそうだ。「ながら」は他語「歩き」を戴いて「歩き」と共に「歩きながら」といふ一副詞を成す。

副助辭が他語を戴いて出來た副詞は、皆變態副詞であつて正態副詞ではない。例へば「歩きながら」は副詞であつてもその上部「歩き」は動詞性があるから、全體としては動詞性副詞である。それでも副詞には相違ない。

本來の副助辭の重なるものは

ばかり 一年ばかり懸る

一里ばかり歩く

だけ 一日だけ休む

百圓だけ使ふ

ぐらゐ 一年ぐらゐ懸る

百圓ぐらゐ使ふ

第六章 靜助辭(附、頭助辭)

第六節 副助辭

二七〇

第六章 靜助辭(附、頭助辭)

第六節

副助辭

二七〇

まで 夕方まで待つ

次の驛まで歩く

ほど 死ぬほど苦しい

山ほど有る

づゝ 一圓づゝ遣る

十圓づゝ讀む

ながら 泣きながら話す

自分ながら恥しい

がてら 物を買ひがてら散歩する 買物がてら行く

などである。用例の中の「」だけが一副詞になる。

右の(1)は名助辭としても用ゐ得る。

あと一年ばかりになつた

この中百圓だけを遣る

一年ぐらゐが關の山だ

此處までが精々だ

の「」は名詞であるから、中の「ばかり」「だけ」「ぐらゐ」「まで」はその名詞の代表部であつて即ち名助辭である。しかしこれは皆副助辭を名助辭化して使ふのである。

「ばかり」「だけ」「ぐらゐ」「まで」は提示助辭にもある。提示助辭の「ばかり」「だけ」は文語の「のみ」の意だが、副助辭の「ばかり」「だけ」は事物の分量を表す語で「ほど」の意に近いものである。例へば「私だけ行つた」の「だけ」は提示で、「一冊だけ讀んだ」の「だけ」は分量の副助辭である。「ぐらゐ」「まで」も二通り有る。「手紙ぐらゐ書けるさ」「他人にまで話す」の「」は提示「十圓ぐらゐする」「東京まで行く」の「」は副助辭。

家が有り次第轉居する。

五人とも揃つた。

學校ぢゆう大騒だ。

時計を鎖ぐるみ偷まれる。

の「次第」「ぢゆう」とも「ぐるみ」の様なものは、文法上の一般的な形式的意義を表すものではなく特殊な形式的意義を表すものであるから、之を特殊副助辭とする。世間では之を接尾語といつてゐる。私は接尾辭と云はうと思ふ。但し世間では副助辭の全部を接尾語と稱して特殊な形式的意義を表すものと見て居る。一般的と特殊のとの區別は程度の問題であるから、そう見ても差支もなからう。

第七節 頭助辭

總 說

頭助辭は助辭の一種であつて、他の語の頭に冠して他語と共に一連辭を成すものである。助辭を分つて動助辭、靜助辭、頭助辭の三つとするのであるから、頭助辭は動助辭靜助辭と同様で一章を立て、説明すべきであるが、其の數が甚だ小さいから、靜助辭附頭助辭と

いふ一章の中の一節として靜助辭へ附說することにしたのである。

從來の文法書には接頭語といふ名目が有つて頭助辭といふ名目は無かつた。この從來接頭語と云つたのも、廣義の助辭の一種であつて、廣義の助辭の中、他語の上へ附くものを指して謂つたのであつた。なせ頭助辭と云はなかつたかといふと、其れは文法上必要なものでないと思はれたからである。例へば「み山」を川「さ夜」ま清水「のみ」を「さ」まの類である。然るに「貴方のお帽子」「先生のお机」の「お」などは敬語として文法上極めて必要な極めて一般的なものである。こういうの接頭語として化外の民の如き待遇を爲すのは不都合である。故に私はこれら他語の上へ附くものを總括して頭助辭とし、その中「お」の様なものを一般頭助辭とし、「み」を「さ」「ま」の様なものを特殊頭助辭としようと思ふ。便宜上一般頭助辭を單に頭助辭と呼び、特殊頭助辭を接頭辭と謂つても善い譯である。

一般頭助辭

一般頭助辭は文法的頭助辭である。それには「御」「御」「大御」の三つが有る。この三つは何れも尊稱又は美稱であつて體言へ附くものであるが、「御」に限り用言の形容詞へも附く。

「お」

「お」「おみ」「ご」の接續 「御」は「お机」「お心」「御歩き」「お寒い」などのやうに用ゐるもので、もと「大」の略音である。そのものを大きいものとして稱へていつたのである。文語でも「御前」「御許」「御山」など用ゐたが、多くは「御涙」「御情」などの如く「おん」と云つた。「おん」は「大御」が「おほん」となり「おん」となつたのである。

「ご」

「おみ」

「お」はもと固有の日本語であつて字音のごつ／＼した語とはなじまない。「お年」「お名前」「おからだ」と云つても「お年齢」「お姓名」「お身體」とは云はない。しかし字音でも十分熟したものでなければ訓の語と同様に感ぜられて「お」が附く。「お銚子」「お土瓶」「お寫眞」などいふ。「お」は母音に始まる有形名詞へは附きにくい。例へば「足」「裕」「帶」などへ附かない。それは「お」が「母音」と連なると長音又は二重母音になり易いから意義が不明瞭になるからである。そういう場合には先づ「御」を附けて「み足」「み裕」……の如くした上で「お」を附けて「おみ足」「おみ裕」「おみ帶」「おみ御髪」「おみ御附」「おみ御かす」「おみ御膳」「おみ御腹」などといふ。但しこの説明に關しては二つの注意が必要である。注意の第一は「御」の附くのは必ずしも母音に始まる語のみではない。「御輿」「御籤」「御酒」などの類もある。それへ「お」が附けば「お御輿」「お御籤」などとなるのは當然である。注意の二は「お」が母音に始まる有形名

詞へ附きにくいといふのは唯附き憎いだけで、全く附かないのではない。例へば「おあねえ様」「おあにい様」「お奥様」「お足」「お垢」「お跡」「お醫者」などの様な例もある。

「お」は「お帽子」「お二人」などの様に名詞へも附き、「お歸り」「お言ひ」などの様に動詞へも附き、「お静か」「お立派」などの様に形容詞へも附くが、大體に於て體言へ附くのである。「歸り」「言ひ」などは活用第二活段が固定して無活用化したもの、「静か」「立派」などは本來の無活用である。動作詞でも形容詞でも無活用のもものは名詞でなくても之を體言といふ。意義が實質化されてゐる。

右の特例として「お」はク活シク活の形容詞へ附いて「お早い」「お遅い」「お白い」「御若い」「お喧しい」「お久しい」などの如くなる。これは用言であつて體言ではない。「お」が用言へ附くのは唯ク活シク活に於てだけである。動作詞では決して「お云ひます」「お歸りませう」などいふことはない。

方言に於ては「お歸りる」「御行ける」「御出でる」などいふがこれも語源に溯れば「御歸りある」「御行きある」「御出である」であつてやはり體言化したものへ附いたのである。現在では「お歸りる」「御出でる」等は既に上一段活下一段活になつてゐるが、それは「お」が附いた後で活用するので、活用するものへ「お」が附くのではない。その證據には「お」なしに「行ける」「歸りる」などと云はない。「出る」は本來下一段であるから「出る」と云へるが「御出でる」の「出

てゐる「出て有る」とは違ふ。

文語で「御」は動作詞(用言の)へは附かないと斷言して古事記萬葉の訓法を正した三矢博士の名論は、口語の「お」にも妥當であると同時に、口語の「お」が動作詞(用言の動作詞)へ附かないことは三矢博士の斷言を裏書するものである。

「み」も固有の日本語である。これは「深山」「三吉野」「眞清水」「眞心」などの「み」「ま」と同源の語であつて、もと稱へていふ語である。其れが尊稱となるに至つて別の助辭となつたので、古い文では盛に用ゐられたのであるが、口語では上に「お」を戴いて「おみ」となる場合にのみ用ゐられる。

「おみ」は單に名詞へ附くだけである。それも作用を表す名詞へは附かない。故に「お受け」「お送り」「お起き」「お空き」などが名詞であり且つ「お」が母音の前に在つても之を「おみ」に換へることは無い。

「御」は「み」「おはん」「おん」と讀むのに用ゐた漢字「御」の吳音である。漢字の字義は天子に關する敬語であつたが、訓にひかれて「ご」は「おん」と同義の頭助辭となつた。しかし元字音であるから字音の上でなければならぬ。必ず「御年齢」「御精神」「御立腹」「御満足」な

どの様に使ふ。「御」といふ字を書いても「お」であるか「ご」であるかは下の語に由つて定まるから讀み方に迷ふ様な場合は殆ど無い。唯「御丈夫」「御立派」「御試験」など「お」「ご」兩方にいふものも多少あるが、其れも前後の關係で大體は分る。何となれば「お」は平易な語で、「ご」は莊重な語であるからである。

「ご」は名詞、動作詞、形容詞、皆附くが、「御精神」「御上京」「御健康」などの如く、凡べて體言(無活用語)へ附くのである。用言へ附くことはない。「御覽じる」などは特例の様だが、これも「御覽」といふ體言を後から活用させて用言にしたのである。「覽じる」へ「御」が附いたのではない。

「お」や「ご」の附いたものに「おなか(腹)」「おつけ(味噌汁)」「おかず(菜)」「ご酒」「ご飯」「ご膳」などの類がある。「お」「ご」を除けば「なか」「つけ」「かず」……は完辭としての語を成さなくなるから、これらは「おなか」「おつけ」……を以て一語と見るべきものである。唯語源に溯つた場合に「お」は頭助辭で「中」「付け」「數」は完辭だとされ、「ご」は形式的の不熟辭(助辭でなく)で、「飯」「酒」「膳」は實質的な不熟辭(完辭でなく)だといふことになる。されば「おみおつけ」「おみおかず」など「お」が二つあるのは何の不思議もない譯である。

「お」「おみ」「ご」の意義 尊稱は他を敬ふものであるが、如何なる關係のものを敬ふかに由つて種々に分けられなければならない。その中「お」「おみ」「ご」は事物又は動作状態の所有者を敬ふものであつて、之を所有尊稱の助辭といふ。例へば「貴方の御住ひ」「御父様の御歸り」などいふ「御」は「住ひ」といふ物、「歸り」といふ動作を敬ふのではなく、その所有者たる「貴方」「御父様」を敬ふのである。

一口に所有尊稱と云つても、その運用に種々の區別が有る。或は不精密な考察では所有者を敬ふ様に見えない用法さへある。故に所有尊稱はその運用上種々に分たれなければならない。それで名詞に於ては單純用法、美稱、自體的用法の三つが有り、動詞に於ては主體的用法、客體的用法の二つが有る。

一 單純用法 「お」「おみ」「ご」が名詞へ附いて

貴方のお帽子 先生のお靴

お父様のお出で

伯父さんのお歸り

奥様のおみ帯

貴方のおみ足

御母様の御病氣

貴方の御親類

の「」の様な用法はその名詞の表はす事物——動作状態をも事物と見て——の所有者者(上例では△△)を敬ふものである。そうしてその所有者は單純に考へた所有者であつて

極めて明白である。故に之を單純用法としその名詞のこの態を單純所有尊稱とする。これは「お」「おみ」「ご」の用法の第一義的なものである。

二 美稱 「お」「おみ」「御」には「お茶」「お湯」「お米」「お魚」「おみ汁」「御飯」などの様な用法がある。これらは自分の茶……でも他人の茶……でもいふのであるから、一見所有尊稱ではない様に見える。我々は之を美稱といふ。「お茶」といふ方が語が美で、「茶」といふ方が粗野である。どうして「お」が美稱になるか。それは最初宮中殿中などに仕へた人々は、君の御料の茶を「お茶」と云ひ、自分の飲む場合でも君の給はる茶であるから「お茶」と云ふ様に、自分の周囲の物は一として直接間接に我が君の物でない者はないのであるから、常に「お」を附ける習慣になつた。それが一般に眞似られたのである。例へば里歸りをした場合など其の家の米、茶を「お茶」「お米」……といふ。これが文化の度の低い閭巷の人からは非常に優美に聞える。そこで西施が病氣になつて里歸りした時の様に郷人皆その盪みに倣つて何でも「お」を附ける。女子の名でも御殿女中の「菊」「梅」は「お菊の方」「お梅の方」である。そういふことが優美に聞えるから女子の名を美しくする爲に一般に「お」を附ける様になつた。

美稱の「お」も最初は單純用法の「お」であつた。それが美稱となつたのは所有者の觀念が不

明確になつたからである。しかし全然所有者を認めないのではない。實質的の所有者はなににしても形式的にはその觀念が有る。誰といふことはなしに唯何となく何等か無形な尊い所有者が有る様な味ひが有つて、この味ひが言語を優美にするのである。だから「お」の附いた美稱は單なる美稱ではない。所有尊稱の巧妙な一運用としての美稱である。彼の川、山、夜、玉を「を川」「み山」「さ夜」「ま玉」などいふのも美稱であるが、「お」はそんな單純な美稱と違ふ。

「お」の附いた美稱は婦人語、小兒語である。成年男子の語ではない。婦人は年齢に拘らず美稱を用ひなければ言語が粗野に聞える。東京の婦人は下賤の女でも美稱を用ひるが、田舎の婦人は相當の家の女でも美稱が少ない。この點は東京の婦人の語を學ぶべきである。之に反して成年の男子は美稱を用ひては言語が女らしく柔弱に聞えていけない。地方人には此の弊は少ないが、東京人には教育の度の低い商工人などに往々美稱を用ひて「お湯」「お米」などいふ人が有るのは婦人語の浸潤である。但し眞の所有者を尊ぶ場合にまで「お」を除いてはならない。その點に注意すべきである。

美稱に於ける三音以上の語へ「お」を附けることは迂遠に聞える場合が有る。「お肴」「お臺ど

第七章 靜助辭(附、頭助辭) 第七節 頭助辭

三七九

第七章 靜助辭(附、頭助辭) 第七節 頭助辭

三八〇

こなどいふ類もあるが、三音以上の場合は第三音以下を略して、「お卵」「おつむ」「お御足」「お鐵(鐵瓶)」「お腰(腰巻)」などいふ様になつたものもある。この法の著しいものは婦人名である。「花子」「雪子」「芳江」「春代」などいふ様な三音のものへはこう云ふ「お」は附けない。「お」が附けば「お花」「お芳」といふ様に下を略する。

三 自體的用法 「お」の用法には「お父さん」「お母さん」「お兄さん」「お姉さん」「お寺」「お宮」「お月さま」「お日さま」「お役人」「お武家」「お一人」「お三人」「御自身」「御貴殿」な

どの様にいふのが有る。他人の父を呼んで「お父様」と云ふのは「父」の所有者たる人(子)を敬ふ單純な用法であるが、子が自分の父に對して「お父さま」といふのは所有尊稱でない様にも聞える。しかしやはり所有尊稱である。凡そ物は皆自己を所有する。自己は自體の所有者である。この意味に於いて「父」の所有者は父自身である。所有者たる父を敬ふ爲に所有者たる父を表す名詞を所有尊稱にすることは出来る筈である。しかしそんな變な敬語はどうして出来たかといふと、其れは最初は美稱として用ひたのであつた。他人の父を呼ぶ時「お」を附ければ敬語であるから優美に聞える。之を自己の父に用ひればやはり優美に聞えて美稱となる。父に對して美稱を用ひる習慣が出来ると、美稱を用ひないことは父に對し

て失禮になり、美稱を用ゐることが禮に合することになる。こゝに於てその所有尊稱は所有者を他に求めずに父自身に求めることになる。それは「父」「母」「役人」「武家」或は「一人」「二人」などの様な人格の名詞、又は「日」「月」「寺」「宮」の様な準人格名詞に限ることである。非人格名詞では美稱は美稱のまゝである。何となれば、婦人が「お茶を」「お無しに」「茶」と云つても茶に對して失禮だとは思はれない。たゞ語が粗野になるだけである。「湯を」「お湯」と云つた所で湯を敬ふ意味は出て來ない。たゞ美稱たるだけである。

「御」の用法には名助辭として下へ附いて、「親御さん」「嫁御さん」「お姑御さん」「弟御さん」「妹御さん」などいふ用法が有る。これは親族關係の語に用ゐるものであるが、現代ではその下に「さん」の有る場合に用ゐる人が有るだけで、大體に於て漸次廢れ行くものである。昔は「さん」の有無に拘らず「父御」「母御」「兄御」「姉御」などその他種々に用ゐられたものである。

この「御」は最初は「伊勢の御」「少將の御」「御だち」などの如く用ゐられ、女房を敬ふ形式名詞であつた。その元は「御前」といふ語（形式名詞）の略語で、「御前」の「御」は頭助辭であつたのである。これが形式名詞となり更に名助辭となつて「父御」「母御」などの如く男女に拘

主體を所有者と見る。

らず親族關係の語に用ゐられる様になり、更に又廢滅せむとしつゝあるのである。

四 主體的用法 これは動詞へ冠する用法の中に存し動作狀態の主體を動詞狀態の所有者として取扱ふものである。

お嬢さまが餘りお晩くお歸りあそばすものですから、奥様が大層御心配遊ばしました。

の「」などがそうだ。「お嬢さま」は「お歸り」の主であるが、それを「歸り」といふ動作の持主と見るから「歸り」を所有尊稱にして「お」を冠する。奥様は「心配」の主であるが其れを「心配」の所有者と見るから所有尊稱にして「御」を冠する。

問接の所有者

この主體的用法は、直接の所有者を敬はずに間接の所有者を敬ふ場合が有る。例へば、

御嬢さまの御歸りがお晩い。

御嬢さま、おいたを遊ばすと御召が御汚れになります。

あの方の、お宅はお庭が随分お廣うございます。

の「」は所有尊稱の主體的用法であるが、何れも間接の所有者「△△」を敬ふ。直接の所有者は形式上「」であるが實質的には「△△」が所有者である。「お汚れ」は御召の動作で

直接の所有者

あるが御召が非人格であるがら御召を敬はずに御召のその所有者たる御嬢様を敬ふ。然るに間接の所有者を敬はずに必ず直接の所有者を敬ふ性質の動詞が有る。例へば

1 彼の方の御宅には善い犬が御有りになる。

2 彼の方の御宅では善い犬が御生れになった。(誤用)

1 御別荘の御庭に珍しい菊が御出来になったさうですなあ。

2 御別荘の御庭に珍しい菊がお咲きになったさうですなあ。(誤用)

の(1)は善いが、(2)は人が笑ふであらう。「有る」も「生れる」も均しく犬の動作であり、「出来る」も「咲く」も均しく菊の動作であるのに、「お有り」「御出来」は「犬」「菊」の所有者を敬ふから善いが、「お生れ」「お咲き」は「犬」「菊」を敬ふから可笑しい。故に知る、動詞の中には、必ず直接の所有者を敬ふものと、間接の所有者を敬ふ場合のあるものとの二種が有る。

其の區別はどうか。「犬が有る」「菊が出来る」などは形式上「犬」「菊」の動作であるが、實質上人が犬を有し、人が菊の發生を所有するのである。こゝにいふ動詞は實質的な所有者が他に求められる。「犬が生れる」「菊が咲く」などは實質的にも形式的にも犬の動作菊の動作である。こゝにいふ動詞は必ず直接の所有者を敬ふ。之を要するに尊稱に於ては形式的な所有者

第七章 靜助辭(附、頭助辭) 第七節 頭助辭

三八四

客體を所有者と見る。

者であるなしに拘らず、實質的な所有者を敬ふのである。

五 客體的用法 自己の動作でも他人に對して爲向ける動作は他人をその動作の所有者と見ることが出来る。例へば

御卒業を御祝ひ申す

御出産を御喜び申す

御仕事を御手傳致す

御意見に御賛成申す

の「祝ふ」などはそうだ。「祝ふ」は自分の動作であつても他人に献上する動作である。献上した以上は他人の動作に歸するのであるから、自分の動作でも謂はゞ他人よりの預かり物である。眞の所有者は他人である。故に「御」は眞の所有者たるべき先方の人を敬ふ。之を所有尊稱の客體的用法といふ。

この客體的用法に就いて甚しい誤解を抱いてゐる人が有る。私は嘗て明治の終の頃、當時の広島縣師範學校長弘瀬時治氏から妙なことを聞いた。『自分が赴任する前から、広島では「御」といふ字の使用法が定められてゐた。例へば「此段御返事に及び候也」などの如く自分の方の事に「御」を用ゐるのは誤用であるといふことでさういふ「御」は總べて使はないことにし、「此段返事に及び候也」といふことになつてゐた』と、縣の規定か師範學校だけの規定

かはつきりしなかつたが、世に杓子定木といふものが有るならばこういうのをいふのであらうと思ふ。所謂る古を師とせずして私智を闘はすものである。苟くも公の規定を作るならば少しは調べたらは善からうと思ふ。まさかこんな規定は長くは存しなかつたらう。

「お」の誤用 「お」の所有尊稱の客體的用法は、總べて直接にその客體たる人を敬ふのである。例へば「若様を御育てする」の「御育て」は直接に若様を敬ふ。「貴方の御仕事を御手傳致します」の「御手傳」も「貴方」を敬ふ。客語は「仕事を」であつても「仕事」は作用であるから人を離れない。故に「手傳ふ」は人を敬ふのである。然るに電車や自動車の田舎者の車掌などがよく

切符をお切り致します。

といふがこれは誤用である。「切る」の客體は切符である。切符を敬ふ筈はない。切符の持主たる客を敬ふつもりではあらうが、切符は有形物であるから人から離れてゐる。切符を敬ふ語を以て切符の所有者を敬ふことは出来ない。或は電氣局か自動車會社で定めた語かも知れないが、そうとすればその掛りの役員が東京語を知らなかつたのである。

切符をお切り申します。

切符を切ります。

など、改めなければならぬ。「申す」は他人に對して行ふ動作を表す形式動詞であるから如何なる動詞も「申す」が下に有れば「お」を附けて客體を尊ぶ所有尊稱にすることが出来るのである。

「お……致します」「お……爲ます」と云へない動詞は、物を客體として行はれる動作を表すものゝ凡べてである。「縫ふ」「打つ」「書く」「持つ」「運ぶ」「取る」「買ふ」等の類皆そうだ。唯人を客體として行はれる動作を表すもの例へば「手傳ふ」「助太刀」「かばふ」「育てる」「教へる」「起す」「ねかす」「尋ねる」「賞める」の類は皆「お……致します」「お……します」と云へる。

特殊頭助辭

特殊頭助辭

特殊頭助辭は又接頭辭ともいふ。

大犬	小鳥	牡牛	牝馬
初櫻	初陣	さ苗	ま夜中
す町人	そつ首	き娘	ど百姓
無考へ	無遠慮	不心得	不さま

いけすかない もの固い こつ恥しい へ難かしい
 取り揃へる さし止める 申し受ける 引つ揃へる

の「」の類がそうだ。

特殊頭助辭は語源から言へば種々である。

「大」「小」「牡」「牝」「初」「初」などは名詞、形容詞の「大きい」「子」「夫」「妻」「僅々」「初々し」など、同源である。頭助辭の形そのまゝで名詞などになるものもあるがその場合は意味が變るのである。

「さ」「ま」

「さ」「ま」などは「嬉しさ」「懲りずま」などいふ接尾辭の「さ」「ま」と同源である。

「す」「そ」

「す」は「す顔」「す手」「す肌」「すっ跳」「すっ裸」「す面」「す小手」「す町人」などの如く用ゐる。「素」といふ字を當てる。意義は、露骨で飾りの無い實際のまゝの意である。その露骨を醜と見た場合には古く「しや」と云つた。古事記に「あししやこしやえししやこしや」などある。「しや」はそれである。古く「しや面」「しや首」と云つたのは今は「しやつ面」「そつ首」といふ。「しや」さばるは「しや木ばる」である。「鯢矛」は「しや千木矛」で「千木」は「とぎ(尖)」である。

「き」

「き」は「生」といふ字を書く。「生石灰」「き藥」「き醬油」などの如く用ゐる。名詞の「木」から轉

じたもので、「木」は材料の意でまだ調合しない純粹なものをさす。

「ど」「だ」

「ど」は「どう」「どん」と「とう」「だ」「づ」「づう」などともなる。「土百姓」「度膽」「ど出腹」「ど盲目」「どう胡座」「どう頭」「どう真中」「どん底」「どん淵」「どん百姓」「團栗」「駄菓子」「駄目」(團栗の語)「と方も無い」とつ拍子もない「圖星」「づ抜ける」「づう體」などの如く用ゐる。

「土」「度」「團」「駄」「圖」などは當字である。これら皆古語の「嚴」「最」「いち」(いちじろしなど)「痛く」などと同源である。原義は大きい意、甚しい意である。それを古くは善い方に用ゐたが口語では、形ばかり大きくて價值の無い意味、醜い意味、憎らしい意味、甚しい意味、劇しい意味に用ゐるのである。このことは國學院雜誌大正十三年 月號第 頁に一言しておいた。

「無」「不」

「無」「不」は字音であるから最初是不熟辭であつたが後頭助辭となつたのである。名詞の上へ附く。出來上つたものは名詞にもなるが多くの場合は無活用形容詞になる。例へば「不心得を誠める」などでは名詞だが「不心得な人」では無活用形容詞である。意味は「無」は無い意味、「不」は悪い意味(不男)、否定の意味(不行届)である。

「いけ」

「いけ」は「いけすかない」「いけ存在」「いけづう」「しい」「いけしぶ」といふ「いけしやあ〜」

「もの」

などの如く用ゐ、憎むべく厭ふべき意である。「^{イカ}殿めしい」「いか物食ひ」「いかつい」「生きる」「なまいき」などの「いか」「いき」と同源の語である。

「もの」は「物固い」「物苦しい」「物悲しい」などの如く用ゐられる。「物固い」は總べての中に何ものか固いと思はれる或るもの（或る點）が存するので、それが何物であるか一寸言へない意である。

「へ」は「屁理屈」へ難かしい」などの如く用ゐ、擲へ所のない價值のないことをいふのである。

分離動詞

「取り揃へる」などの「取り」はもと形式動詞である。「取りも揃へず」「取りも合へず」などの如く「も」などを挿むことも出来る。「も」の有る場合の「取り」は形式動詞であるが、「取り揃へる」「取り繕ふ」などいふ時は下の語と融合してアクセントまで變つて一完辭化するのであるから、その場合の「取り」は頭助辭化したものといふべきである。「さし」「申し」「引き」等其の他こゝういふものは頗る多い。これも所謂分離動詞の一種である。